青い蝶～君との冒険～

shiraha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青い蝶～君との冒険～

【Ｎコード】
Ｎ５７７７Ｗ

【作者名】
ｓｈｉｒａｈａ

【あらすじ】
幼なじみの二人カンナとアクタ（五話でトーヤ本人により改名）は３年前…洞穴で追いかけっこしていたら、行き止まりのはずの洞穴の奥から光を見た。そこへ向かって走るとそこには銀髪少年がいて…３年後に会う約束をしていた。果たして３人はまた会えるのか？不思議系冒険ファンタジー。

冒険の始まり（前書き）

ゴンくらいの年の頃は秘密基地で遊んでたなぁと思い出しながら同じ目線で一話一話一緒に冒険していこうと思います。

冒険の始まり

「お前ってどんくせーよな。」

川の中でずぶ濡れな私に誰かが手をさしのべてくれた。

誰？逆光で見えなー…

ジリリリリ…

何？めっちゃうるさい！

目覚まし時計に回し蹴りをして、いつものようにベッドから起きた。

ガシャン

さすがに壊れちゃったかな？とシンプルな目覚まし時計を拾うと部屋のドアが勢い良く開いた。

「オイ。クソ妹うるせぇよ。つーか、また目覚まし壊しやがって。」

このたれ目で泣きぼくろのある人物は私の兄の貴（たか）。外面の良さだけ

が取り柄の猫被りだったりする。

「あぁ。クソ兄貴か。つーか朝から怒らないでよ。う・る・さ・い。」

私は冷静に制服に着替え始めた。

「おめっ！女だろ。つーかお兄様と呼べ。母さんが飯ってよ。」

“つーか”って兄貴も使うよね。でも誰かも使ってた気がする。

―そう。夢の中の―

コツン
コツッ

窓から小石の当たる音がした。犯人はヤツしかいない。

カーテンと窓を開けた。

「トーヤのばか。何よ朝っぱらから。」

隣の家の幼なじみを睨む。

「おっは。ってか、お前の回し蹴りの音で毎日起こされてんだよ。」

トーヤは金髪のサラサラな髪をなびかせカラコンで青になってる目をひくつかせた。

「フン。ヤンキーの癖に。昔は眼鏡で真面目で弱虫でちびでバカで」

「途中から悪口になってるから。今日の放課後ドーナツおごれよ。」

「やっぱり？」

私は舌打ちをした。なかなか話しをそらせないもんだね。

「カンナー！遅刻するわよ！」

「あ、お母さんだ。じゃあ放課後ね。」

窓を閉めようとしたら、トーヤに引き止められた。何やら真剣な顔をしている。

「トーヤ？」

「わりぃ。やっぱ…マカロンな気分かも。」

「はいはい。」

外見は変わっても中身は変わらない幼なじみに少し安心した。トーヤは中学に入ってからいわゆる暴力的な喧嘩をするようになっていた。

『アイツより強くなりてぇんだ。』

問い詰めたらそんなことしか言わなかった。

準備をすませ玄関を出ると、兄貴がつったっていた。

「ちょっと邪魔。」

「若いって良いねぇ。」

「は？」

兄貴が門から出るとトーヤが見えた。

「約束は放課後でしょ？」

兄貴が見えなくなるのを見計らってトーヤは悪ガキみたいに笑った。

「今から冒険に行こうぜ？」

「だからあれは夢だったじゃん。」

「二人同時に同じ夢見るか？」

3年前私とトーヤは不思議な体験をしていた。いつも秘密基地にしていた洞穴で追いかけっこしていたら、行き止まりのはずがトンネルのようにどこかに繋がっていたのだ。

そして、夢の中の子と遊んだ。

「今日が約束の日だ。カンナが行かないなら俺一人で行く。」

「本気？私たちもう中学生なんだよ。」

結局トーヤの後から付いて行く事にした。

だけど、あの洞穴はもう無いかも知れない。私たちの町は山に囲まれた場所にあった。ここ3年で土地開発のせいで自然がなくなりつつある。

「お。秘密基地は無事だ。」

「良かったぁ。」

「あれれ？嬉しそうじゃねぇか。」

「それより、前みたいにトンネルが現れるかが心配。」

トーヤは考え込んだ。

「もしかして、追いかけっこしたら良いかもよ？」

「パス。バカじゃねぇの？」

「バックトゥーザフューチャーと同じ原理でスピードが大事かもよ？」

【3年前…】

「カンナ逃げろ！ハチの巣に石が命中した！」

「うそ！！？」

追いかけっこと言うよりただ無我夢中にハチから逃げていたら、真っ暗なはずの洞穴の奥から光が見えた。

「トーヤ！」

「いいから走れ！」

バッチャーン

トンネルを抜ければ川の中。近くの岩場に誰か座っていた。

「…スゲー顔。」

「君もね！」

顔面から泥っぽい川に落ちた私は、びしょ濡れだった。顔も汚れてる。不幸中の幸い、浅い川で良かった。

一方銀髪で猫目の綺麗な少年は泣いていた。

「ぷっ！」

「あはは！」

初対面で私たちは笑い会った。

「ここどこだよ。」

トーヤの一言で我に返るまでは。

冒険の始まり（後書き）

主人公のカンナの風貌がまだ謎ですが、次の話で銀髪の彼目線で暴かれます！

金髪…、クラピカと被りませんよ。クラピカは純粋な金髪でトーヤはちょっとオレンジがかってます。

なんせブリーチなんで。

暗殺一家

俺の家族は全員暗殺者。食べ物にも毒が入っている。それはもしもの時の為の訓練らしいけど、今では毒が入って無いと足りない気がする。

「キル。最近楽しそうだね。」

長男のイルミが部屋の前にいた。

「別に普通だけど。」

「まさか、逃亡しようとか考えてないよね？…ははっ。そんなに動揺したら敵に殺されるぞ？」

兄貴の目が怖い。光の無い暗殺者の目だ。

それよりどうやって抜け出そうかな。3年前の約束は今日だ。ひょっとしたらあの二人は忘れてるかも知れない。無駄足になるなら行かない方がいいかも。

「キルぅ！」

母さんが叫び出した。まぁ、日常茶飯事なんだけど。

「俺はここだよ。」

「キルぅ…！またいなくなったらどうしようって思ったわ。」

母さんは3年前を気にしてる。

「…もう一人じゃ外には出ないって言っただろ。それにあの時はゾルディックの土地内にいたから。」

「今日の仕事はイルミと行きなさい。」

「ブタくん…ミルキとの予定だけど。」

「嫌な予感がするの。」

俺はいつも監視下の下にいる。

「うるさい。」

ズサッ…
変形させた手で自分の母親を刺した。

「キル！」

グサッ
邪魔なミルキも突き刺した。

これで俺は自由だ。

スケボを脇にかかえ、俺は屋敷を出た。

けどすぐ兄貴に見つかった。

「あれ？キル今からどこに行くの。」

手が恐怖で震える。長男のイル兄の目を見ると金縛りのように動けなくなった。

「ウォーミングアップにミケと追いかけっこしようと思っただけだよ。」

「そっか。まぁ、今日の仕事は俺一人でも大丈夫だからキルは好きにすればいいよ。けど、仕事は仕事だからね。今夜の約束を守れなかったら分かってるだろ？」

「う…ん。」

「じゃ、現地集合ってことで。」

きっと兄貴は母さんとミルキの叫び声を聞いて戻って来たはず。急がないと。

何でこんなに必死になってるのか分からない。実際は3年後に会う約束しか覚えてない。二人と会ったすぐ後、顔も名前も記憶から消えていたからだ。

ただ今はあの岩場のある川に行かないとと言う使命感が俺を動かし

ていた。

「キルア様。」

「なんだゴトーか。」

「イルミ様から伺っております。ミケと訓練なさるそうですね。」

「あぁ。自分でできるからいいよ。」

「いつもの場所に呼び寄せてあります。お気をつけて。」

ゴトーは執事の家に入ってった。こういう時こそ色々な人と会う。

しばらく走っているとカナリアがいた。

「キルア様。ここから先に行ってはなりません。」

「へぇ。もう聞いたんだ?俺が母さんとミルキを刺したこと。」

「どうして…。」

「通っていいよな。」

カナリアは傷つけたくない。俺はわざと睨みつけた。

「…はい。」

あと4キロ先に約束の場所がある。本気で走れば25秒でつくけど、地道に走ることにした。

【川の流れる岩場】

「ちぇっ。まだ誰もいねぇのかよ。」

キルアは3年前を思い出した。あの頃は殺しをすると涙が出る時期だった。もちろん家族に見せない為に隠れて泣いていた。

罪悪感じゃない虚無感。心に穴が開いたように胸が痛んだ。

ジャプン！

ぼーっとしていたら、川から何か落ちる音がした。

「相変わらず派手なコケっぷりだな。カンナ。」

「キルア！」

自分でも驚いた。目の前にいる少しクセのある黒髪ショートの小柄なたれ目の少女を見たら自然と名前が出て来た。

「俺もいるぜ！」

「…お前誰？」

「本気で泣いていい？ねぇ！」

「あはは！忘れたの？」

「嘘。トーヤだろ？金髪と青い目似合わねぇな。」

「キルアに憧れてこうしたんだぜ！」

約束を守って良かった。

「二人の分までハンター試験に応募しといたから。」

「ハンター試験？」

「なにそれ？」

「まずはここから出ようぜ？」

カンナの水に濡れて透けたセーラに気付き、俺はシャツを脱いで渡した。

「ありがと。」

「どっから出るんだよ。」

甘い雰囲気を読めないトーヤは必死に出口を探していた。

二人の武器

ドスッドスン…

「でさ。武器持って来た？」

「はっ…はっ…！」

「持って…きてっ、ねぇよ！」

キルアが門を開けてやっと外へ出れた。

「はぁっはぁ…。ミケ、私たちを忘れちゃったのかな？」

「しっぽ振ってたから覚えてたと思うぜ？」

「ちょっ…二人とも待てよ！」

キルアは私の手を引いた。

「トーヤ。ハンター試験無理かもな！」

トーヤは突進して来た。

「俺は試験に置いてはキルアより自信があるのさ。」

「確かこっちの世界の文字読めないとか言ってなかったっけ？」

「私も読めないよ。試験とか無理。」

キルアはフフンと笑った。

「俺がペーパーテスト受けると思うか？」

私とトーヤは首を横に振った。

「もちろんハンターのテストだから実技さ。」

「実技？」

「ハンター試験を受けるのも困難らしいからスッゲー楽しみなんだよ！」

キルアが珍しくウキウキしてる。ウキウキルアだね。

「で…？まずドコに行くの？」

「ドコってそりゃ…。なぁトーヤ？」

「腹が減っては戦はできぬってな！」

自信満々なトーヤ。

「ハンターって狩りでしょ？だから武器探した方がいいんじゃない？」

「だよな。」

「じゃあ俺に聞くな！」

そういえばお金持ってない。もともとおこずかい日直前でなかったけど、武器買えないよ。

「家にあったの持って来たから選べよ。」

私の気持ちを読んだかのようにキルアがポケットから何かを取り出した。

「これ…牙？」

「こっちは五本の爪か。もっとカッケーのないのかよ。」

「二人とも不満なら自分で作れ。」

私は鋭い牙でトーヤは爪をポケットに入れた。

「ハンター試験の応募ポスターが貼ってた店が気になるんだよな。」

「じゃあそこから行こう。」

「二人で話進めんなよ。」

私たちの冒険はスタートした。

この牙と爪が何を現すとか私はもちろんキルアにもまだ分からずにいた。

【その頃のゾルディック家】

「母さん大丈夫？」

母親とミルキは専属医によって手当てを受けていた。

「キルがここまで成長してくれたなんて！」

「クフークフー。アイツ次会ったらただじゃおかねぇからな。」

イルミがポンと手を打った。

「そう言えば俺の武器の大切な原料がなくなってるんだけど、ミルキ…知らない？」

「じぃちゃん！」

ミルキは走って逃げた。

「ま、ミルキにはできないと思うけど。」

「キルってば盗みまで…！よくやったわ！」

「ははは。俺の部屋の罠を見破ったのは認めるよ。けど、あの幻とも言われた上羽竜から苦労して奪った牙と爪だから…必ず取り返す。」

「ついでにキルの様子を見て来てちょうだい？」

「分かった。」

こうしてイルミもハンター試験を受ける事にした。

「もともと受ける気だったけど。」

失礼しました！

不気味な店と人

町に出てきた。なんか市場っぽいところで果物や野菜のイイ香りが漂う。

「おばさんそれ3つちょうだい。」

キルアが私とトーヤにリンゴくらいの大きさの紫色の果物を買ってくれた。

「ありがとう。」
「これ美味いのかよ?」

カリッ…
「まぁまぁイケるぜ。」

キルアが美味しそうに食べるから食べてみた。

「にっがー…。」
「ぺっ…!よくこんなん食えるな。」

「コレは栄養分が高くて体にいいから。ちゃんと食っとけよ。」

お腹空いてたからトーヤも私も結局全部食べた。

「こっち。」

キルアは路地裏を指差した。柄の悪そうなお兄さんがちらほら座っている。

「二人ともキョロキョロすんなよ。」

キルアがカフェっぽい店に入ってったから私とトーヤも続いた。

薄暗い店内。

「ほら、これハンター試験のポスターだぜ。」

「字が読めないけど何となく分かる気がする。」

「見た目普通だな。」

そこへ白髪のおじいさんが近寄って来た。なんかオーナーっぽい。

「残念じゃったな。もう応募は終わっとる。」

「じいさんはハンター試験についてなんか知らない？」

おじいさんは眉を潜めた。店内を見るとカウンターの奥の席にフードを被った男が座っていた。他に私たち以外客はいない。

「ハンターになりたいのなら、あの男に聞きなさい。」

そう言ってマスターらしきおじいさんは店の奥に入った。

「キルア。私が聞いてみたい。」

「はいはい。」

私はフードを被った人物に話しかけてみた。

「すみません。」

その人は手のひらサイズの地図と方位針を差し出して来た。

「ヒントはこれだけ。」

低く掠れた声。顔には仮面をしていて表情が見えなかった。

「…港への地図だ。」

「キルア行ったことあるのか？」

「ま、地図があれば大丈夫だろ。」

「今誤魔化したよね？」

途中で日が暮れてしまい、宿に泊まる事になった。2人部屋を3人で使わせてもらえるようキルアが上手く交渉してくれた。

「女の子は別がいいんじゃないかい？」

宿のおじさんに言われたけど、兄妹だからとか言ってた。

【宿の部屋】

「俺気付いたんだけどさ。」

トーヤが呟いた。

「なんだよ。先に風呂入るか？」

「この爪…暗闇で青く光るんだよ。しかも綺麗な模様が見える。」

「マジ？」

キルアがトーヤに駆け寄るのを見て、私も牙を見た。

５センチはある牙。コレも暗闇で青く光っている。

「綺麗。なんか揚羽蝶みたいだね。」

「あげはちょう？」

「俺らの住む世界にいる蝶だよ。」

キルアの顔がみるみる間に青白くなった。

「まさかこの牙と爪、あげは竜ってヤツのかも知んない。」

「じゃあ、こっちにも揚羽蝶いるかもね。」

「それよりキルアの顔色ヤバすぎ。大丈夫かよ？」

キルアはベッドに横になった。

「ヤバい。コレ、兄貴の宝物だ。」

「兄貴ってまさか…イルミさん？」

「血も涙もないって言う？」

「あぁ。今頃俺を探して…」

コンコン…

「ひぃぃぃ！」
「トーヤ情けないわね！」
「…終わった。」

コンコンコン

「3人ともお腹空いたんじゃないかい？余ったパン持って来たよ。」

ガチャ…

「ありがとうござ…！？」

宿のおじさんの背後に黒髪をなびかせた男が立っていた。冷たい目をしている。

「おじさん大丈夫？」

「…あぁ。」

「や。君…キル知らない？」

この人がイルミさんだ。早くキルアにサインを出さないと。

「なんだよ。邪魔しないでくれる？俺ら駆け落ちしてやっと二人きりになれたのに。」

トーヤが下手な演技をして出てきた。

「俺の勘違いだったかな。悪かったね。」

イルミさんがいなくなったと思ったら耳元で…

「また会おう。」

と囁かれた。

宿のおじさんが腰を抜かしてしばらく動けないみたいだったから、トーヤと部屋まで送ってあげた。

パタン…

「キルア大丈夫？」

キルアが震えていた。

「兄貴が…。」

「まさか何か言われた？」
「俺も言われた。」
「トーヤは黙ってて！」

「『反抗期だね。』とだけ。」

「ったく！不気味な兄貴だなぁ。」

慌ててポケットを調べた。牙は入ったまま。

「あれ？俺も奪われてねぇよ。アイツ何しに来たんだろうな。」

「忠告…だよ。」

「キルア？」

「兄貴は面白がってるんだ。俺がまだ何もできないのをただ笑って見てる。」

しーん

何も言えない。キルアが苦しそうなのに何もできない。

「らしくねぇ。お前なら『バッカじゃねぇの？』ってケロッとしとけよ。」

「なんちゃって金髪には分かんねぇよ。」

「俺だってな、キルアに負けてんの悔しいよ。悔しいから影で色々努力とかしてんだよ！こんなん言いたくねぇけど、今のキルアは越

えられる！」

キルアは顔を上げて勝ち誇るトーヤをポカンと見た。

「ぷっ…！二人とも変な顔。あははっ！！」

「うるせぇ。」

「トーヤが俺を越えられるだ？バッカじゃねぇの？」

「身長は越えてるけどな！」

なんだかんだで雰囲気は明るくなった。

「このパンに毒とか入ってないよね？」

パンを食べようとした時ふと思った。

ぱくっとキルアが食べて一言。

「あぁ、しばらく両手の感覚鈍るくらいの毒だから大丈夫。」

「ぜんっぜん！大丈夫じゃねぇだろ。」

「キルアには効かないんだね。」

「まぁね。多少のしびれはあるけど。」

ハンター試験がまた遠く感じるのだった。

二羽の蝶

カンナはいつも二羽の蝶の形をした髪飾りで軽く前髪をとめている。

「それ…しててくれたんだ。」

「キルアがくれたんだよね？」

「そっか。カンナも記憶なくなってたのか。それにひきかえトーヤは覚えてたらしいけどね。」

トーヤは自慢気に何度も頷いた。

「俺って天才？」

「キルアの武器は爪とか変形させるやつでしょ？私は…」

「シカトすんな！」

「カンナは飛び蹴りとかあるから武器はハリセンでイイんじゃね？」

「ハリセンて…。」

「俺はボールにするぜ！」

トーヤがまともな事を言った。

「ボール？」

「あぁ。この爪を付けた手のひらサイズのボールだよ！」

「トーヤにしてはいいんじゃねーの。」

キルアはニヤリと笑った。

「じゃあさ、カンナの武器もトーヤが考えればいいじゃん。」

「俺が考えていいのか！？」

「えー…。どうしようかな。」

キルアってば面白がってるし。

「それより道合ってるの？港どころか山に突入してない？」

「近道だから大丈夫。」

「近道しちゃ意味無いと思うよ。なんかあの店から試されてる感じしない？」

「カンナは何も知らねぇだろ。ここはキルアに…キルア？」

「よし。引き返そうぜ。」

「待てよキルア！」

この三人で大丈夫かな。不安すぎる。

「例えばさ、肘に牙つけるとか。」

「キルア？私が肘に牙つけて被害が出ないと思う？」

「ぶーっ！俺に刺さりまくるし！」

「トーヤ笑いすぎ！」

遠回りした事で体力ついて来た気がする。まさかわざと遠回りを？

「トーヤ喉かわいた。」

「おう！」

うん。やっぱ違うね。キルアの銀髪とトーヤの金髪がなんかキラキラ輝いてた。

私も染めよっかな。

「水飲んだら止まらないで行くから。」

グイッとキルアの飲みかけを渡された。

「ありがと。」

「おい！カンナの分はこっちにあるぞ！」

キルアからもらった水は冷たくて甘い気がした。

「トーヤ。」

「なんだよキルア。」

「拗ねんなって。」

「じゃあ、スケボー貸して？」

「えー。じゃあカンナをおんぶしよっかな。」

「マジ止めろ！」

二人の会話を黙って聞いてたら、おかしい気がして来た。

うん。

トーヤはキルアが大好きらしい。

「カンナ？」

「なんか二人はいいよね。」

「なんだよ。」
「うらやましいだろ？」

「私も男の子に生まれたかったなぁ。」

走っても息切れしなくなってきた。ひょっとしてこの上羽竜の牙のおかげなのかな。

「頼むからそれだけはやめてくれ。」

と二人に言われました。

そんなこんなで港が見えて来た。強そうな人達が並んだ船を発見。

「あれだな。」

「緊張して来たね。」

「イカツいオッサン多くね？」

こうして私たちはギリギリ船に間に合った。

船の中を見渡すと女の子がいない！！

「カンナ…とりあえずこれに着替えて。」

キルアに渡されたズボンとシャツ。そして布の帽子。

「女の子だってバレたら不利かもしんないからさ。」

「分かった。」

人目のつかない場所でセーラー服を脱いでズボンに着替えた。

ドキドキしてきた。

これから何があるか分からないけど、二人がいたら大丈夫って思った。

改名

船の上。
この船には２０人くらいのハンター受験者と5人の乗組員が乗っている。

「俺改名するから。」

目立たないアメ色の服にまだ慣れない私はソワソワしていた。

「改名？トーヤはトーヤだろ。」

「かっこいい名前がほしい！キルアみたいな！カンナみたいな！」

「へ？私の名前かっこいい？」

他の受験者たちは柄の悪そうなおじさんばかり。私たちは見るからに子供だ。しかも騒いでる。

「おいボーズ。遊びじゃねぇぞ！」

一人のおっさんがトーヤに詰め寄った。

「遊びじゃねぇんだよ！」

「と…トーヤ？」

おじさんはあまりの迫力に後退りして逃げてった。

「で？候補はどんくらいあんの。」

「いや。決めた。俺の名字の芥辺（あくたべ）からとってアクタ！」

「アクタ？」

「てかいきなり改名とか作者に都合の悪い事でもあったんじゃないの？」

キルアは鋭く海に向かって睨んだ。

「作者って誰？」

「今日から俺はアクタだ！」

「どうでもいいよ。カンナその服似合うじゃん。」

「嬉しくないよ。」

こんな旅人みたいな服やだ。

「女だとナメられるんだぜ？」

「キルア下ネタかよ！」

「トー。アクタうるさい。」

どうにか船酔いはなさそうだけど、あとどれくらいで着くんだろう。

「ねぇ。どれくらいで着くの？」

さすがキルア。船長にタメ口来たー！

「誰だお前。」

「誰でもいいじゃん。」

「あと3時間で着く予定だが、ハリケーンが近付いているらしいからな。」

「面白くなりそうだね。」

なんだこの二人の会話。てか船長若すぎやしない？まだ３０歳くらいだよ。

「と…アクタ？静かだね。」

「アクタ？俺か。」

「いやいやいや。自分で忘れるなよ！」

「男装に男言葉が板についてきたぞカンタ。」

「カンタ？人の名前まで変えないでよ！」

そこへキルアが近付いて来た。

「ハンター試験の間はカンタがイイかもな。」

「やだよ！」

「声も低めにな。」

髪も帽子に隠してるし、見た目男だよ。

「じゃあ寡黙キャラにする。」

「寡黙？ムリムリ。」

「カモク？イイ名前だな。」

「アクタは名前から離れようか！」

船の中で名前が変わった。

ハリケーンが近付いて来て、海へ逃げる者、必死で船を動かす者、船にしがみつく者。
それぞれ命がけだった。その時の記憶がほぼない。

そしてまたのどかな海になった。

「今回は3人か。」

「ほんとだ。まぁまぁ楽しかったな。」

「キルアだけだよ。」

「なんでハンター試験を受けたいんだ？」

船長が突然真顔になった。

「俺は暇つぶしだよ。ハンター試験を試したいんだ。」

「そうか。帽子は？」

「帽子て…。わ、俺様は力くらべさ。」

「なるほど。金髪は？」

「俺はキルアより強くなるため！」

船長はしばらく黙った。

「お前ら合格。船が着いたら赤い花屋に行け。道が開ける。」

「オッサンさんきゅ。」

「てか、カンタ俺様キャラなのかよ。」

「引くな！思わず口に出ただけだし。」

「いいじゃん俺様で。」

「キルアってばまた面白がって！」

笑っていられるのは今のうちさ

私たちはそう呟いた船長の言葉を聞いてなかった。

赤い花屋。
どんなところだろう。

だんだんと近付く島にワクワクしかしなかった。緊張とか恐さなんて微塵もなかったの。

赤い花屋

七色の島と言われてるこの島の人々はカラフルなモノが好きらしい。

「赤い花屋だから目立つと思ったらカラフルすぎて見分けがつかねーじゃん。」

キルアの言う通り、建物は赤、オレンジ、黄色、緑、青…とにかく色とりどりで。

「ん？なんかさここの建物みんなが花畑みたいじゃない？」

「カンタ。今は男だぞ。」

キルアが電柱のてっぺんにヒュンと登ってすぐ下りて来た。

「赤い花屋ってひょっとしてペンキ屋の事かも。あっちに地味なペンキ屋が見えたぜ。」

「赤い花屋は赤い花屋だろ？ペンキ屋なわけねぇじゃん。」

「アクタも行ってみたら分かるよ。」

キルアの言うペンキ屋は【赤い花屋】と看板に書いていた。もちろんキルアが読んでくれたんだけどね。

ここに着くまで様々な色の建物を見て来たから、普通の木造を見たら変な安心感を覚えた。

カランカラン…
お店に入ると誰もいない。

「誰かいねーの？」

「オッホン。ここにおるじゃろ？」

初老の小人がいた。顎ヒゲが特徴的でよく見ると綺麗な顔をしている。

「お前たちハンター希望者じゃろ。」

「なんで分かった？」

「この店は必要なモノにしか見えないんじゃ。」

「なんかさ、いつもキルアが良いとこ取りだよな。」

「仕方ないよ。キルアだもん。」

私とアクタはコソコソと話していた。

「簡単には教えてやらんぞぃ。」

「そう来なくちゃ。」

「お前に用はない。帽子の…ちょっと来なさい。」

私は手招きされるがまま近付いた。

「女である大切なモノを塗り替えてもええかの？」

「それって変な意味ですか？」

「匂いじゃ。その甘い匂いを隠してやる。」

おじいさんはペンキの色を選んで調合した。そして私の全身に塗っていった。

「あれ…？冷たくない。色もついてない。」

「スゲー！キルアも見たか？」

「あぁ。見てるよ。じいさんやるじゃん。」

それはまるで魔法みたいだった。

「これがお前たちの代償じゃな。緑のドアの部屋に私のペットがおる。ソイツに連れてってもらえ。」

緑のドア？なんだろ。キルアがそのドアを開けた。

「…は？」

「うそだろ。」

「ひっ！ドアなくなってる！」

上羽竜がいた。
キルアに聞かなくても分かる。爪や牙が揚羽蝶の模様に光ってたから。

「竜に食われるー！！」

「落ち着けアクタ。ミケを思い出せ。」

「もっといやだー！」

この竜が試験会場まで送ってくれるなら、操る人がいるはず。

「誰か…いませんか？」

威嚇する竜の影から人が出て来た。全裸の女の人。いやらしさがない。例えるなら彫刻のような美しさ。

「ぶー！」

アクタは鼻血をふいた。

「大事なとこ隠したら？」

キルアはからかう。

「その必要はない。私は人ではないからな。」

女の人は綺麗な白い鳥に変わった。

「少し上羽竜を眠らせるから、その間に背中に乗れ。」

鳥が喋るのは違和感あるけど、私とキルアはアクタを引きずって背中に乗った。

「このヒモに掴まれ。」

「あのー、まさかこのロープが命綱とか言わないよね？」

「率直に言うとこのヒモをはなせば死ぬ。」

「俺がいるから大丈夫だぜ？」

「キルア！」

こうして上羽竜の背中に静かに乗る事を約束された。

「騒いだら命はない。」

「ぎゃーー！？このウロコ何だ！」

「アクタ。頼むから眠ってくれ。」

ドスッ…

キルアの手刀がミゾオチに入り気絶するアクタでした。

竜の背中

竜の背中に乗ってるなんてこんな神秘的な事はない。はずなのに。

「これさ。獣って言うより生臭いね。」

「魚みたいな匂いしてんな。」

「なんで臭いのー！？」

現実は厳しかった。

「このヒモ邪魔なんだけど。切っていい？」

「キルアは良くても俺様は落ちるから！」

「ぶっ…！今俺ら以外いねーのに俺様キャラとかわりとノリノリなんじゃねぇの？」

「アクタうるさい。」

竜の背中は広くて手綱みたいなのを三人で持ってる。左からキルア、私、アクタの順だ。

「なぁ。全裸の人。」

キルアが竜をコントロールする白い鳥に話しかけた。

「今は上羽竜に道を教えているので話せません。」

「ちぇー。つーか、話してんじゃん。」

「キルア。俺がシリトリをしてやろう。」

突然竜が旋回した。

「ちょっと待って！落ちるー！」

私の叫びはむなしく、竜は二回転して私たちを背中でキャッチした。

「今、一瞬落ちたよね。」

「落ちる落ちる言うなよ受験生が聞いたら卒倒するだろ。」

「すっ…げぇー！何だよ今の！！めちゃくちゃ楽しかったぜ！！」

クールなはずのキルアがハシャギ出した。

「キルアは一人で落ちたら？」

「カンタ顔色悪いぜ。」

「まぁキルアの肉体なら落ちても耐えられるかもね。」

「ほめてんの？」

バチバチとカンナとキルアの間に火花が散った。

「なぁ。」

「ん？」

「カンナが落ちたら俺が助けるから。」

「キルア…！」

「隣に俺がいる事を忘れるなよー。」

また竜が旋回し出した。５回は回っただろう。そして着陸した。

「ここがハンター試験会場がある島よ。案内するわ。」

「いや。全裸はヤバいでしょ。」

キルアがニヤニヤすると女の人はリクルートスーツに着替えていた。

「アクタ。鼻血はしまってね。」

「これは血の汗だ！」

「血の汗？カンナの世界にはそんなのあるの？」

「無いと思うよ。アクタの脳の中は変な言葉しかないから気にしないで。」

「それより早く行こうぜ！」

キルアを筆頭に私たちはお姉さんの後をついてった。

そして定食屋さんにたどり着いたのだ。

「ここよ。」

入ってくお姉さん。キルアも黙って付いてった。

「カンナ？行くぞ。」

「…うん。」

普通の定食屋さんだよね。

「ステーキ定食。」

「え？ステーキ定食は（もがっ）」

「しぃっ…！これは合い言葉だから。」

キルアの手に口をふさがれ囁かれた。

そんなやり取りをしていると隠し部屋へと案内してもらう事になっていた。

そこはエレベーター。

「あなたたちならきっと受かるわ。」

とお姉さんに言われ、私は最後に握手してもらった。

ぐぃーん（エレベーターの音）

「言い忘れてたんだけどさ。」

ステーキを喜んで頬張るアクタと私にキルアは呟いた。

「ハンター試験ってマジで命がけらしいから。油断したら死ぬかも。つーか、油断しなくても死ぬヤツ山ほどいるって聞いたぜ。」

アクタがフォークを落とした。

「待てよ。キルアは俺にお前死ぬぞと言いたいのか？」

「そう聞こえたならそうなんじゃない？」

「んな無責任な！」

私はお肉を飲み込んでからキルアを見た。

「私たち友達でしょ？」

「俺に友達なんかいないよ。」

キルアの目が冷たくて心が凍えそうになった。

「あぁ、自力で生き残れたら友達として認めるかもね。」

チン…

突き放されたアクタと私はキルアから少し遅れてエレベーターを下りた。

地下の薄暗い場所に立ってる自分が、キルアの言葉で魂が抜けたようにふらついていた。

ナンバープレートを豆みたいな人から渡されて、投げたくなった。

こうして私のハンター試験は最悪のテンションで始まった。

一次試験開始

プレートはキルアが９９、アクタが１００、私が１０１だった。

知らないおじさんが一人ずつジュースをくれた。トンパとか言うらしいけど、興味ない。

「カンタ。知らない人からモノもらったらダメって言ったでしょ？」

「だってぇ。」

「だってじゃないの。」

なんてアクタとコント（？）していると。

「プハー！俺のどかわいてたんだよね。カンタ。俺にもちょーだい。」

「いーよ。」

ジュースを飲むキルアはサマになっていてまるでビールのＣＭのようだった。

良かった。いつものキルアだ。

「そーだ。カンタにプレゼントあんだ。はい。」

とキルアが出したのはなんとフラフープだった。

「キルアぁ？どうして？」

よく見ると組み立て式だった。

「俺は？俺には？」

「カンタは自分で考えてよ。アクタは…飴一つで。」

ジリリリリ…

そんなこんなでサトツさんと言う紳士的に見える試験管が出てきて、一次試験は後をついて来て下さいとの事だ。

が…。

「キルグァー！それか・し・て。」

アクタがばてぎみに言った。

「俺に追いつきたいなら鍛えるいいチャンスじゃん。あれ？カンタは？」

カンタは何とフラフープで「アハハハッ！」と言いながら華麗にかけっこ飛びをしていた。

すでにはるか前にいたのだ。

「キルアのせいだぞ。俺を後ろにのせろ。」

と言うのはカンタの勢いを止めるのはアクタしかいないからだ。

「はぁ…。分かったよ。」

んで、スィーっと気軽に進んでいたら誰かに声をかけられた。

「おいガキ。おめえら汚ねぇゾ。」

「何で？」

「サトツさんはついてか来いって言ったからズルではないよ。」

「はぁ？ゴンお前あいつらの味方かよ！」

文句つけて来たのは某サル顔の怪盗を思い出させる男。そしてゴンと言われたのは髪をツンツン立てた可愛らしい少年だ。

そこへなぜかカンタがバックして戻って来た。

「みなさん。争いゴトはよくありません。アハハハ！」

すかさずアクタがフラフープを取り上げた。

「あれ？私今まで何を…。あ！キルア、アクタズルい。私も乗るー！」

そこにいた人々が色んな意味で静まったのは言うまでもない。

そして両頬に雫と星をペイントしたピエロの恰好した男がニヤリと笑った。

「あの子ボクと同じ匂いがする（はぁと）。」

と呟いた事をカンタは知るよしもなかった。

「気を取り直して、俺ゴン。君たちは？」

結局三人とも走りながらゴンたちと話している。

「俺はキルア。こっちのフラフープ男がカンタで金髪青目かぶりがアクタ。」

と分かりやすく紹介してくれた。

「ちょっと待ったぁ！俺様は普通にカンタです。」

「俺も普通にアクタ。」

ゴンはハハッと苦笑いした。

「こっちがクラピカでレオリオ。」

よく見ると金髪の美少年もいた。

「よろしく。」

「ガキが増えたな。」

「カンタってフラフープしてる時とキャラ違うね。」

ゴンが可愛いく首をかしげながらキルアに聞いた。

「カンタは自分じゃ無意識なんだよ。」

「どーして？」

みんなは心の中で思った。どうしてもこうしてもねぇよ。と。

レオリオが上半身裸で全力疾走しているうちに光が見えて来た。

「天のお恵みです。」

しーん。

他の受験者はやっと開放された気分になっていたと言うのに、フラフープカンタのせいで台無しになっていた。

「これ本当にわざとなの？」

ゴンは呟いていた。

そしてカンナはキルアの思惑通り強制的に男装キャラになっていた。

ヌメーレ湿原

サトツさんがメヌーレ？ヌメーレ？湿原の説明中。

「…死にますよ？」

（ってえーっ？普通に言われても！）

「カンタ。声に出てる。」

とキルアのツッコミ。

「そいつはニセモノだー！」

いきなり男と人面ザルが出てきた。

その時のアクタとカンタはと言うと。

「おい。あのサルサトツに似てねー？プッ。」

「だ…、ダメだって。ぷぷっ！ぶはっ。似てるー！！」

と別の事で盛り上がっていた。そこへトランプがサトツと男の元へ素早く飛ばされた。

キャッチしたのはサトツだった。

「かぁっこいい！」

とカンタは目を輝かせ、ピエロのような、ジョーカーのような恰好の男を見た。

キルアは周りのジトーっと言う目に気付かないカンタへ一言。

「普通サトツだろ。」

・・・・。

気を取り直して。

今、べちょべちょべチョべチョ。

「くそっ！俺の勝負服がっ！」

アクタがなぜかラメを入れた学ランの裾を曲げ出した。

「俺様なんかアメ色が茶色だし。」

と言って周りを見るとゴンもキルアも…いや、みんな汚れてない。

「お前ら近寄んな。」

よんなよんなよんな…

「もう。キルアもうちょっと言葉選ぼうよ。」

ぼうよぼうよぼうよ…

ゴンのが一番きくう。

「アクタ行くよ！」

「おう！」

私たちはアクタはゴンへ私はキルアに突進した。
それを器用に避けながらキルアはゴンに話しかけていた。
「ゴン。もう少し前へ行こうぜ。」
「うん。霧も深くなって来たしね。」
ゴンが素直に頷いた。
「ヒソカだよ。あいつ」
「どこー？どこにヒソカ様が！？」
『キルアの真剣な眼差しがカンタの一言で歪む。』
「あいつ霧に乗じてやるぜ。」
『カンタはガクガクとキルアに胸ぐらを』

「ねぇ。アクタ何言ってるの？それより、レオリオークラピカー！キルアがもっと前に来た方がいいってー！」

「できればそうしてるよー！」

「そこを何とか！」

ゴンのバカでかい声でキルアの手が止まった。

「緊張感のねーやつ。」

よろけたカンタが思った。キルア嬉しそう。それを見たアクタが思った。チッこけろやカンタ。

「アクタ。あの山になんかいる。」

「あ？」

キルアの頬に柔らかい感触が。すぐに気付いたキルア。

「ざっけんな。」

カンタの手を引き口と口が重なる。

いや、お二人さんカンナは今男装してるから。

「おい。何もねぇぞ。」

と何も知らず振り向くアクタ。

「カンタ？顔真っ赤だぞ。」

カンタは顔を隠しながらアクタを睨んだ。

「っるさい。アクタのバカ。」

それを見たキルアが爆笑している。

「本気なのにな。」

カンタのつぶやきは二人の笑い声に消え入った。

キルアは顔には出さないが内心ドキドキしていた。カンナがいきなり『あんなことやこんなこと』するなんて。

キル君？『』内間違ってるよ。

つーか。まだ心臓ドキドキ言ってるし。カンタの方を見るとパチッと目があった。が、カンタはフンと顔を背ける。

素早くキルアが周りこむ。

「なぁ。俺本気だぜ？」

「へ？」

「だからあのキ…」

「あーあー！マイクのテスト中。…うん。もうすぐ着くね。」

「ちぇっ。」

と言いつつ嬉しそうなキルア。

「ちょっと待てよ二人とも早すぎ！」

とアクタはやる気なさそうに走っていた。

「あと少しだよ。」

カンタは呑気に「ゴール」なんて言っている。

「人の気も知らないで。」

アクタがボソッと意味深発言をした。

二次試験直前

さて。何故アクタとカンナがのんびりしてるかと言うと、自分の世界に戻った時、トリップしたその日その日時に戻るからしい。

「はぁ…はぁ。お前ら人間かよ！」

と息を切らせながらアクタがブツクサ言う。

「アクタが鍛えてないだけでしょ。」

「そーだぜ。俺目指してんじゃなかった？だったら体から鍛えねーとな。」

「キルアはともかくカンタはさっきまで俺と一緒に息切らしてただろ！」

なぜか汗一つかかないキルアとカンタ。

「くそ！キルア一つ下だろーが。」

「そうだっけ。精神年齢は俺が上だね。」

「あ！ゴンだぁ。クラピカとレオリオも。あれ？ゴン途中からいなかったっけ。」

とカンタが疑問に思ってる。

「あぁ。助けに行ってたぜ。カンタが俺にき…」

「キルア？それは秘密だよ？」

「へいへい。」

キルアが頭の後ろで手を組んだ。

「あれ？どうしてみんな中に入んないんだろ。」

ゴンが盛大な独り言を言った。

「あれ見ろよ。入れねーんだよ。」

「あっ、キルア！」

ゴン嬉しそう。

「つーか。お前ここまで来るなんてどんなマジック使ったんだよ。」

説明中。

「はぁ？臭いかいで来たぁ？犬かよ。お前絶対変！」

「えへへ。」

ゴンはなぜか照れていた。

グルルルル…
グルルルル…

「ねぇ。何か出て来そうだよね。」

珍しくカンタがおびえていた。

「カンタ。かわいい。」

ゴンが衝撃発言をした。

「かわっ？ええ！？俺様は男だ！」

カンタは真っ赤になって帽子で顔を隠した。

「えー？かわいいよ。ねぇ、レオリオ。」

「おい。俺にふるな！俺は男には興味ねぇ。」

「いや、ゴンならありうる。」

金髪美少年のクラピカがしゃべった。

「え？ありえたらダメだろ。」

「カンタは男だぜ。」

キルアとアクタがそんな事を言った。この二人、カンナに変な虫がつかないようにしてるようだ。

１２時になって扉が開いた。何だかんだでカンタはしっかり構えてる。

「ブハラ。お腹すいた？」

「ペコペコだよ。この通り。」

めっちゃスタイルのイイお姉さまと巨人（？）が出て来た。

「なにあのお腹…。」

「カンタ？」

「トランポリンになりそう！」

バカが一人いた。

「おいおい。カンタってバカなのか？」

「リオレオよりは賢いぜ。」

「確かに。」

「おい！レオリオだ！クラピカまでどういう意味だ！」

「静かにしてよ。」

そしてキルアが一番大人の発言をするのでした。

二次試験に料理対決をすることになるとは誰も想像していなかった。

けれど、アクタは中華料理店の息子。

どうなる？カンタ！

６人は合格できるのか！次回衝撃の展開が。

待ってるとか待ってないとか。

ともかくブハラとメンチの登場で次回に続く。

「次回まで待てねーよ。」

「先に進めようぜ。」

「キルア、レオリオ。待ってあげようよ！」

「ゴンは優しすぎるよ。」

ゴンの優しさで場が和んだ。

ブハラのランチタイム

メンチの説明によるとブハラとメンチに料理を作り美味いと言わせたら合格だそうだ。

「デザートなら得意なのにな。」

とカンタがもらした。

「俺はたまごかけごはん！」

「ぶはっ。ゴン！それって（もがっ）。」

「今度食わせろよ。」

アクタの口をおさえレオリオが苦笑いで言う。

「私も。」

「俺も。」

クラピカもキルアもゴンに優しい。

「キルアってゴンのこと好きなの？」

「はぁ？好きだぜ。面白いじゃん。」

カンタがショックを受けてＢのＬな世界を想像していた。

「本命はお前だけ。」

とカンタの耳元で囁くキルア。

「友達じゃないのに？」

「…。」

それをぼーっと見ていたアクタ。

「ねぇ。アクタってカンタのこと好きでしょ？」

いきなり直球来たぁ！アクタデッドボォールッ。

「んなっ！アクタは男だぞ。」

「そうなの？」

ゴンは野性的な勘で見破っていた。

そしてブハラのランチが決まった。

「俺の課題はフダの丸焼き！ここにいるのなら何でもＯＫだよ。」

「はじめ！」

メンチが始まりの合図をした。

アクタは内心焦っていた。ゴンに気付かれるなんて他の奴らにも気付かれてんじゃねぇか。

バシン

頭を思いきり叩かれた。

「ぼーっとしてると終わるぜ？」

犯人はキルアだ。余裕な笑みが鼻につく。

「キルア！どっちが早く丸焼けるか勝負だ。」

「いーぜ？勝ったら？」

「負けた方が罰ゲームだ。」

「ＯＫ。行くぜ。」

そんなやり取りを知らないカンタは。

バギッボギィ！

ブタを二段蹴りで仕留めていた。

そしてポケットからライターを出し…

「フフッ。私も不良よね。」

とブタを焼いていた。

「キミ。良いもの持ってるね（はぁと）」

「カタカタカタカタ…」

ヒソカとカタカタ言わせてる男ギタラクルが出てきた。

「ライター貸してくれる？」

「二つあるんであげますよ。」

「どうも。女の子が危ないよ。」

「俺様は男だ。」

「じゃね。」

カンタは二人と別れた。

…

ギタラクルは頭や顔に刺していた針を抜いた。

シュルルー

「あースッキリした。窮屈なんだよね。」

「いつ見ても面白いね。」

「あの女邪魔なんだよね。」

「そ？ならライター貸さないよ。」

ギタラクルは…なんとイルミだったのだ。

その頃のキルアとアクタは…。

「俺が一秒早かった！」

「いや、俺だぜ。」

「あぁぁぁあ！」

カンナがそこへ突進して来た。

「おわぁ！」
「あぶね！」

なんとかキルアとアクタが止めた。

「二人ともごめん！」

「俺とキルアどっちが早く着いたと思う？」「キルア…。」

ブハラに次々と食べられていくブタ。その中超ブルーな人一名。

「ねぇ。アクタどうしたの？」

「ゴン。聞いてはならないこともあるのだよ。」

「ほんとどうしたんだよ。」

何も知らない三人がそんな話しをしていた。

ひとまずここは６人とも合格。

握り寿司

「そういえば二人とも何で競争してたの？」

「フッ。男と男の秘密だぜ？」

やっぱキルアって絵になるー。と見とれているカンタ。美形って罪だよね…。

「カンタ？今の冗談だからツッコめよ。俺痛いヤツじゃん。」

「あ。思わず見とれちゃって。」

ほわーんとした空気が流れる。

「て、おい！カンタは男だろ！」

「問題ない。カンタは」「マジでラブラブしてんじゃねぇよ！」

レオリオとクラピカの会話にアクタの声が重なった。ゴンがまぁまぁとアクタをなだめている。

「それより次はお寿司だよ。」

「スシって何だ？」

キルアがキョトンと言った。アクタとカンタが顔を見合わせ笑う。

「行くぜカンタ！」

「だけど、難しいんじゃない？」

二人はキッチンから出て行った。

その後、レオリオの大声で二人の行った場所は明らかになる。

…

「俺の叔父さんスシ職人なんだけど習っとけば良かった。」

「あのさ、今何した？」

１０分前にさかのぼる。

「カンナは何で俺の気持ちに気付かねぇんだよ。この髪どめも腹立つ。いっつも大切にしやがって…。」

と髪どめを奪われた。今の状況は手首をネクタイ（学ランの下に着用していた）で縛られ、顔の距離1センチ。

「アクタくん？いきなりどうしたの。」

ほんといきなりです。

ヒュン

ぽちゃん

「俺の叔父さんスシ職人なんだけど習っとけば良かった。」

と言う流れになった。

「今何した？」

ドン

「おっとごめんよ。」

ヒソカが通りかかり、アクタを突き飛ばした。

ガッ…
二人の歯と歯がぶつかり、…って！突き飛ばす方向わざとだこの人。
「おしかったね。」
ネクタイは外されており、カンタはアクタをひっぱたいた。
「最低！」
その頃のキルアは。
ピカッ
水中に何か光るのを発見。ひろってみると二羽の蝶の髪どめだった。
「キルア？どうしたの！あ。それってカンタがいつもしてるヤツじゃん。」
とゴンが触ろうとした。
「触るな。」

キルアがひょいと手を上にあげた。背が少しだけキルアが高いので有利だ。

「むう。まぁ魚釣れたし行こう。」

ゴンは先に歩いてった。

キルアは髪どめを眺め考える。これはキルアが女の子に生まれて初めてプレゼントしたものだ。二羽の蝶一羽はスカイブルーそしてパープルピンク。自分とカンナを表したつもりだ。再会した時つけていてくれて安心したのになぜこんなところに？

いや、お気に入りって言ってくれたしまさか誰かが？まさかアクタか？何かとつっかかってくるしな。

「ゴン待てよ。つーか、何で髪どめに気付いたわけ？」

「ん？帽子の隙間から見えてたよ。」

二人はキッチンに向かった。

【キッチン】

「ぶーっ。」

カンタは怒っていた。もちろんアクタに。

「おい待てよ。あれはヒソカのせいじゃん。」

何事もなかったかのように綺麗に魚をさばくアクタ。

「それじゃないもん。髪どめ、アクタも一緒に」「よ！カンタ。」

その声の主にカンタの顔色が悪くなる。ポンっと肩に置かれた手の先を見ると…

「キッ…キルアさん。ご機嫌うるわしゅー？」

「おいおい。カンタどうし（ビクゥ！）」

キルアからアクタにとてつもない殺気が。

「カンタ。目つぶって？」

「キルア？そんなみんなの前で…。」

「プッ。いいから。」

胸ポケットに何か入れられた。目をあけ、中を見ると髪どめが。

「ごめんね。」

「何で？カンタじゃないだろ。」

「ピューピュピュー」

アクタは口笛を吹いて誤魔化していた。

「お前ら試験はいいのか？」

「もうできてるよ！」

ガッ…

アクタはキルアに足をひっかけられ、スシを地面に落とした。

「キルア！何すんだよ！」

「みんな不合格らしいからもう意味ないぜ。」

キルアの言う通りメンチは全員不合格と言っている。

どうなる！ハンター試験！

綱無しバンジー

今崖の上にいます。クモワシの卵をとるそうです。

「まさかこれは…。」「命綱無しかよ。」

と真っ青になる私とアクタをよそに他の４人は楽しそうだった。

「あー良かった。」

「こーゆーのを待ってたんだよね。」

「走るのやら民族料理よりよっぽど早くて分かりやすいぜ。」

キルアにゴン。そしてレオリオの歓喜の声。

グイッと私は手を引っ張られた。

「行くぜ！」

「よっしゃー！」

キルアに腕を引かれ、私はアクタの手を掴んだ。バランスを崩し、私とアクタもキルアに続き崖に飛び込む。

「いやぁぁぁあ！」
「ぎゃぁぁぁあ！」

「二人とも目を開けないと危ないよ。」

「もうすぐで糸に着くぜ。」

私は必死で手を伸ばした。（ちなみに途中で二人の手をはなした。）

ぐんっ
クモワシの糸は弾力があり、私を簡単に受け止めてくれた。

「みんな無事だな。」

クラピカの声を聞いて安心した。

「アクタにカンタ。早く卵取れよ。置いてくぜ！」

「レオリオ早かったね。」

卵をなんとかとり、崖をよじのぼった。

「下を見たらだめ。下を見たら落ちる。」

「怖いの？俺が引っ張ってあげようか？」

「ゴン…！ありがとう。けど頑張るよ。」

崖に登る時、指の爪がはがれた。それも経験だから内緒にすることにした。

崖に登ったらクモワシの卵をゆでた。ブハラの反応でゆで具合が分かったのだ。

「美味しー！！」

「スゲー！市販のと全然違うな。」

ゴンは格闘系の男に半分あげていた。お人好しなんだから。

「やめるのも勇気じゃ。テストは今年だけじゃないからのう。」

登場場面が省かれていたネテロ会長がかっこよくセリフを決めた。

第２次試験後半。メンチのメニュー合格者４２名。

「そういや、俺が背中押さないと二人ともヤバかったんじゃねぇの？」

キルアがニヤニヤ笑ってる。

「それは…綱無しバンジーした事なかったから怖かっただけだから。」

「バンジーもしたことねぇだろ。」

果たして二人はキルアの友達になれるのか！

「カンナとは恋人になりたい。」

「…もう、男装キャラ止めていいのではないか？」

「クラピカにバレてる！？」

ショックを隠せないカンタであった。

「男装だぁ？カンタは男だろ。」

ぺたぺた

只今レオリオがカンタの胸を触っております。

シャキン

キルアの爪が鋭利に変身！

「オッサン。…死ね。」

「うわ！なんだってんだよ！」

「今のはレオリオが悪いね。」

「むしろ触っても意味のない大きさなのでは？」

「クラピカぁ！泣いていい？ねぇ。泣くよ？」

「わりとあった気がしたけどな。」

アクタの発言にキルアが反応した。

「触ってねぇよな？」

笑顔だ。キルアの笑顔が怖い。

「さぁてな。飛行船来たぜ！」

レオリオだけ女と気付いていないらしい。

二次試験終了。

ヒソカと言うオトコ

ヒソカは誰もが恐れるジョーカーみたいな男。

「ねぇ。ヒソカさん。」

「おや？占いでもしたいのかな？」

「占いできるんですか？」

今飛行船の中にいる。キルアとゴンとアクタは飛行船内の探険に向かった。レオリオとクラピカは寝てる。

私はちょっと寝てから探険に向かおうとしたけど、トランプタワーを作ってるヒソカを見つけて声をかけることにした。

「僕が怖くないのかい？」

「うん。一匹狼の人好きかな。」

「いいの？女の子丸出しだよ。」

「ヒソカさんにはバレてもいいかな。」

パラパラ…
ヒソカの手によりトランプタワーが崩された。

「クックックッ。面白いねキミ。」

ゾクゾクする。なんだろう。怖いもの見たさと言うのと似てる。

「トランプタワー作ってみる？」

「いいんですか！」

「クックッ。はい。」

トランプを受け取り、立ててみるけど、一つ目も立たない。

「プルプルしすぎ。こうやって…。」

ヒソカさんに手を重ねられびっくりした。

「そう。最後崩したら最高だよ。」

その時アクタの声がした。

「何してんだ！」

「トランプタワー作ってるだけだよ。」

「コイツは危ないヤツだぜ！」

アクタの大声で周りの受験者が起きた。睨まれている3人。

「アクタ。分かったから静かにしよ？」

ガルルル…

まるで野獣のようにヒソカを睨みつけるアクタ。

「おいおい。どうしたんだ？」

「レオリオ助けて！」

レオリオは立ち上がった。

「アクタ落ち着け。」

ポンっと肩を叩こうとしたがアクタに手を払われたレオリオ。

「カンナに何した！」

「カンナ？」

「アイツ女なのか？」

ざわめく部屋。

「カンナだ？カンタだろ。」

レオリオも混乱している。

「やべぇ。キルアに殺される。」

カンナは髪を下ろした。

ぱさり

「ごめんねレオリオ。」

「可愛いじゃねーか！」

入り口から殺気が。

「アクタ？どういうこと？」

「キルア！来るなぁ！！」

「わぁ！カンタ可愛い！！」

「カンナだぞゴン。」

そしてまたみんな寝るのだった。

「ねぇカンナ！」

「ん？どしたのゴン。」

「二人ともおすすめだよ。」

コソコソと耳元で囁かれた言葉。

「へ？二人って？」

「えへへー！」

その時の私は幸せそうなゴンの顔に癒されていた。

「アクタ。」

「もういいだろ。」

「…何かあったら許さないからな。」

「は？カンナってキルアが思うより普通だぜ。」

この二人を見てヒソカが笑っていた。

「カンナって意外といいな。」

「レオリオ。ロリコンって言葉を知っているか？」

「ちがっ！そっちじゃねーよ。」

「聞かなかったことにしよう。」

クラピカは静かに目を閉じた。

トリックタワー

私、確かみんなで何もない床から降りる入り口を探してたはず。

なんで…落ちてんのー！？

ドスッ

「いったー！くない？」

「キミ。過激なのは良いけど。」

「ヒソカさん！憧れてます！！」

ヒソカがクッションになってくれたのだった。

「うーん。僕もキミのこと嫌いじゃないかな。それより今は前へ進もうか。」

本来ハート、ダイヤ、スペードのマークが語尾につくはずだがそこはイメージでいこう。

壁に説明が書いてある紙が貼ってあった。

私読めません！

「ヒソカさん。私薄暗くて文字が読めません。読んで欲しいんですけど…。」

ヒソカは一瞬目を細めた。

「“ここは二人で協力しても良し、個人で進んでも良しの道だ。ただし、どちらか一方が死に至ると失格である（ニコニコマーク）”」

どちらにしろ足手まといになってしまいそうだな。

「一緒に行っていいですか？」

告白の勢いで言った。

「良いよ。あ、めんどくさいからタメ口でよろしく。」

めっちゃ笑顔で言われ、なぜか背筋が凍るほどの寒気を感じた。

「ん？手を繋ぐの？」

「うーん。キミの手すっごくイイよ。」

「はい？」

とか何とか言いながら二人で進んで行くと青い扉と赤い扉が見えて来た。

「こっちの青い扉が『ミラーワールド』で」

「私こっちにします。」

ヒソカが説明してる途中でカンナは決めていた。カンナは青い扉を開けた。

扉を開けるとそこは鏡で敷き詰められた部屋だった。自分が何人もいるみたいで変な感じになる。

「鏡の中の自分の表情が違う。」

一つの鏡に触れてみた。悲しそうな顔。

「本当は気付いてるの。キルアとアクタの気持ち。でも選んだら今までの関係が壊れてしまうから私は選ばない。」

鏡の中の自分が話し出す。

「違う。そんな事ない。」

そう言いながら後ろに下がった。

「そうよ。私は二人とも手玉にとるために今は手の平で転がしているの。アナタには分からないわ。」

後ろの鏡の中のカンナが話す。

「やめて！誰か知らないけど出てきなさい！私が相手になるから！」

このまま相手のペースにハマってはいけない。ゆっくり瞬きをしてから深呼吸をした。

「おい。カンナ聞いてんのかよ。」

アクタの声。けど眼鏡をかけて髪は黒い。金髪の前のアクタだ。

「あれ？アクタ。」

周りを見渡すといつもの通学路だった。

「おいおい。何寝ぼけてんだ？」

デコピンされた。って！手繋いじゃってるし。

「アクタくん。手。」

「あ？何を今さら。いつも繋いでんじゃん。」

当たり前のように言うし。繋いでる手にキスされた。何。この甘い学園生活。

そこへ手と手の間をチョップする誰かが来た。

「いってー！」

私には当たらなかったチョップ。後ろを見ると学ランを来た…。

「キルア！？」

「カンナおはよ。昨日の宿題見せてくんねー？」

「…。すいません。意味が分かりません。」

頭がこんがらがる中、二人は口喧嘩してる。キルア学ランかっこいいけどさ。

「あ。カンナにアクタおはよ。」

ゴンまで学ラン！じゃなくて…。

急に手首をつかまれた。

「カンナ。これ以上この世界にいちゃだめだよ。僕についておいで。」

ヒソカは学ランじゃなかった。私はヒソカの言うとおり後をついてった。通学路の曲がり角に白い入り口が見えた。

「キミは理想の世界にいなくて後悔しないかい？」

ドアノブを握るヒソカがカンナに問いかけた。

「思い通りの世界なんてつまんないよ。」

ガチャ…

ドアを開けるとトリックタワーの通路に戻った。

「どうなってるの？」

「カンナは作られた世界に行ってたんだよ。」

「作られた世界？」

「そう。カンナの心が望む世界。残念。あの中にボクはいなかった

ね。ずっと閉じ込められる人もいるみたいだけど。」

確かにとっても居心地良かった。アクタとラブラブなのを除いてはね。

「次の課題も面白そうだ。」

ヒソカの声に反応して顔をあげると目の前に二人の男が立っていた。

なかなか簡単にはゴールにたどり着けないみたいだ。

ライトおあレフト

目の前に二人の男が立ちはだかった。

モデルっぽい細みの美男が左、右には岩っぽい筋肉モリモリ男。

急に美男が話だした。

「私の名はクリオリス。一人ずつ戦う相手を選べ。こっちはヘリシタンだ。」

「僕なら一人で倒せるけど、ルールだから仕方ないね。」

そして二人が指差したのは…！

「だよね。」

「ヒソカもイケメンが好きなんだ。」

クリオリスの方を選んだ。

「だってあの筋肉は見せかけでしょ？まぁ、キミも弱いけどね。」

「見せかけなの？そしたら筋肉の人にしようかな。」

「やめた方がいいよ。ヘリシタンは力が強いから可愛い顔がぐちゃぐちゃになるからおすすめできないな。」

クリオリスが爽やかに笑った。

「じゃあこんなルールにしてくれないかな。」

ヒソカがひらめいたように言った。

「二人が僕一人と勝負して１０秒以内で勝ったら、カンナと試合させてあげる。けど僕が勝ったらそこを通してよ。」

「いいだろう。」

「クリス…規則を破ったら殺されるぞ。」

クリオリスだからクリスと呼ぶんだ。

「カンナがスタートって言ってね。」

私がスタートと言ったら三人とも素早く動き始めた。速すぎて動きが見えない。

「はい。おしまい。」

ドサッ…ドサッ

5秒もたたないうちにクリオリスとヘリシタンは倒れた。

「行くよ。」

「あの…ありがとう。」

「僕は暇つぶしをしただけだよ。」

ヒソカはウインクした。敵にまわしたら恐ろしいな。とゾクゾクしていた。

その頃のゴンたちは。

「アクタとカンナ大丈夫かな。」

「今は走るのに集中しろ！潰されるぞ！」

ゴロゴロゴロゴロ…

大きな岩から逃げていた。

「あれ？今カンナがいたような。」

「マジかよ！」

「さすがに引き返せないな。キルア何している！」

クラピカが驚くのも意味ない。キルアが岩に立ち向かおうとしているのだ。

「カンナを助ける。」

「行くよキルア！」

ゴンに引っ張られるキルアなのでした。

「ゴンが言い出したよな。」

「レオリオ、そこは空気を読め。」

「ゴン…わざとなのか？」

「レオリオ転けるぞ！」

この二人のやり取りは誰も聞いていなかった。

「俺もいるぞ。」

トンパは会話に入れていないのでした。

アクタは…。

カタカタカタカタ…

「あのー。次は右でいいですか？」

カタカタカタカタ。
ギタラクルは左をさした。

「…なんなんだよ！」

頑張れアクタ！

白い部屋とパンツ親父

あれ？ギタラクルとか言うヤツがいない。
しかも、ここどこだよ！！！

アクタは真っ白な部屋にいた。

「アイテムとか…見当たらねぇし。」

一人は寂しいから独り言を言うアクタ。

「カラクリがあるはず。」

壁に手を当てると…

〈そうかい？〉

〈ん。だからね！ヒソカは…〉

カンナとヒソカの声が綺麗に聞こえた。

「カンナ！」

反応なし。と言う事はあっちからは聞こえない仕組みなのか。

次の壁はゴロゴロと岩が転がる音がした。その横は水の流れる音。

最後は違っていた。

『選ばれしモノよ。ここは天国と地獄の部屋。』

天国と地獄…運動会を思い出した。

『この部屋に隠された鍵・ドア・呪文を探し出せたら、最短距離でゴールができるようになっている。が、この部屋に入って自力で脱出できた男は今まで一人もいない。』

「マジかよ。」

『この部屋に入れた強運の持ち主は君だけだからな！』

どどーん！と音がしそうな勢いに本気でズッコケそうになったのを踏み留めた。

『そういうわけで幸運を祈る！』

白い部屋
声が筒抜けの壁
初めての侵入者
転がる岩
流れる水
ライバルの会話

なぞなぞだとしたら？

真っ白な音の世界。

「そんなに簡単なわけないか。」

ひょっとしたら鍵が鍵の形とは限らない。例えばカードや指紋、暗証番号で開く可能性がある。

「待てよ。鍵と言っておきながら何かのボタンを押せば的なヤツかも。ヒモを引っ張ってと言うパターンも。」

鍵かぎカギ…キー。

白い…カギ
ホワイトキー
ｗｈｉｔｅ
ｋｅｙ

ｈｅ　ｗｅ　ｉｔ　ｋｙ
彼は　私達は　ソレ　空気読めない

私たちは空気。　彼はソレを読めない。

まさか。空気にカギが隠されてるのか？

他の英語とか思いつかねぇし。この世界の文字とか分からない。いい加減覚えねぇとヤバいな。

てか白い部屋の中から探せとか名探偵じゃあるまいし。

クラピカとかすぐ解けそうだな。

呪文から考えてみるか。案の定俺は今この世界の言葉を話している

はず。

「開けごまー。」

違うか。

「王様の耳はロバの耳ぃ。」

ちゃうか。

「白雪姫！」

ご…

え。今音しなかった？まさか白繋がりか！

「白いパンツ！！」

ゴゴ…

あと一息。

「白いカットバン！」

しーん…

『白いパンツより面白いのを言いなさい。』

「って呪文じゃねぇのかよ！！」

『さぁ早く！』

なんだこのキャラ。顔が見たいような見たくないような。白いモノで面白いって…。

そもそも白いパンツのどこが…？

「白いブリーフ。」

『ぐあーハッハッハ！！！行ってよし！真っ直ぐ進めばたどり着くぜよ！！』

「あんたどんなキャラだよ。」

ゴゴゴーゴゴ…

『パンツ王子よ羽ばたけ！』

「もう黙ってくれ。」

扉を開けてくれたのは有難いけど…。

「誰だよあんた！」

「白いパンツです。ぶはっ…！」

変なヒゲ面のオッサンが付いて来た。

「お笑い好きの４７歳独身だ！ちなみに求人で高額のアルバイト見つけて今ここにいるんだ。」

「案内してくれんの？」

「いや、暇だから付いてくだけだ！」

懐からごそごそ何か出したから俺は一歩退いた。

「スルメ食うか？」

「腹減ってたんだ！食う食う！！」

「そーか。兄ちゃんブリーフ派か？ぶふっ！」

まぁ気ぃ使わないオッサンだ。

いっちば～ん

ヒソカといたらとても楽だった。たまにヒソカが血に身悶える時があって怖かったけど、もうすぐゴールらしいしね。

「ここだよ。」

「やった！いっちば～ん！」

扉を開けて勢いよく飛び出すとすでに一番最初に着いた人物がいた。

「よ！」

「アクタが一番！？」

ヒソカは一人でトランプタワーを積み始めていた。

「ま、ラッキーだったんだ。」

「隣の人は？」

「あぁ。案内人的な？スルメくれるぜ。」

よく分からないけど、アクタも運が良かったらしい。

続いてギタラクルが着いた。
彼、強そうだよね。

「キルアはまだかな。」

「キルアの事だからとっくに着いてると思ったのにな。」

そして長い時間が過ぎた。

《残り一分です》

ゴゴン
ドアが開いた。

「キルア！」

現れたのはキルアにゴンにクラピカ。

「ケツいてー。」

「短くて簡単な道が滑り台になってるとは思わなかった。」

「キルア！ゴン、クラピカ！！お前らもう来ないかと思ったぜ。」

《残り３０秒です》

「アクタにカンナも着いてたんだ。ギリギリだったね。」

「もう手がマメだらけだ。」

「全くイチかバチかだったかな。」

レオリオとトンパが現れた。

この５人の最後の試練は長く困難な道を選ぶか短く簡単な道を選ぶ

かだったらしいが、短く簡単な道は人数を絞らなければならなかった。

そこで、ゴンが閃いた。長く困難な道をみんなで通って短く簡単な道へ穴を開けて入ればいいと。

「トンガリ坊主。さすがだな。」

「オッサン誰だよ。」

キルアにスルメを差し出すオッサンでした。

《タイムアップー！！第３次試験通過人数２５名！！》

こうして私たちは外に出られた。

「このスルメうまっ！」

「だろ！キルア。ってあのオッサンいなくなってるし。」

「キルアだけズルいー！俺もスルメ欲しかった！！」

「ゴン。知らない人にモノをもらってはいけないのだよ。」

「あー、腹減ったぁ。俺もスルメ食いたかったぜ。」

「レオリオにスルメ合うね。」

騒がしい６人。

「おや？ご機嫌ナナメみたいだね。」

ヒソカの目線の先にはギタラクルがいた。

「キルに友達はいらない。」

ギタラクルは呟き、カタカタカタカタ…とまた音をさせていた。

「いいね。ゾクゾクしてくる。」

それに身震いするヒソカがいた。

……

ネテロ会長の部屋。

「どうじゃ。今年の受験生は。」

「あのアクタってヤツが面白いですね。あとは…まだ詳しくは見てませんがキルアと、あのヒソカの眼力は寒気がしました。」

「ほう。わしにもスルメをくれんかの？」

「今出来立てをあげますよ。」

この男の正体はいかに！ただの視察の男なのか？

引き続き出る可能性有り。

お守り

「やっとハンターらしい試験だな。」

船の上でアクタが呟いた。それにはワケがある。

無事トリックタワーをクリアした私たちにはくじ引きが待っていた。

４次試験はゼビル島と言う所で行われるらしい。そこで狩る者と狩られる者を決めるくじ引きが行われたのだ。

自分が引いたナンバーのプレートをハントすればいいわけだ。

で、今はゼビル島に向けて船に乗っている。

「あれはどういうこと？」

「ん？」

「キルアとゴン仲良くなりすぎてない？」

少し離れた場所に腰かけるキルアとゴン。

「カンナは何番引いた？」

「私は３４番だよ。あのイケメンなお兄さん。」

「よく覚えてたな。俺は３６２なんだけど、覚えてねぇんだよな。」

ほとんどが自分のプレートを隠しているから分からない。

「私は色仕掛けでいくわ！」

「無理無理。」

冗談を言っている私とアクタ。気合いを入れた参加者たちのただならぬ緊張感が船を支配していた。

これから過酷なサバイバルバトルが始まるなんてまだ想像していなかった。

「カンナ。」

船を出るときキルアに呼び止められた。

「これで危ない時合図すればいつでも駆けつけるから。」

と手渡されたのは犬笛だった。確か犬しか聞こえない笛なはず。

「ありがとう。けど、自分で勝ち取るから。」

「ちぇっ。可愛いくねぇの。」

私は犬笛をネックレス代わりに首にかけた。いいお守りになる。

ギュッと笛を握りしめてから船から下りた。

ゼビル島

島に着いたら、トリックタワーで最初に着いた人からスタートと言う事を聞かされた。

「と言う事はアクタが一番？」

「ま、これぞ実力の世界だな。」

「いいなぁアクタ。」

ゴンは素直に羨ましがっていた。

アクタがスタートした。次にヒソカ。

そして私がスタートした。

森に入っていくなり誰かに口を塞がれた。

「俺だ！アクタ！」

「ちょっといきなり驚かせないでよね。」

アクタは何やら真剣に私を見て来た。

「いいか。このままじゃ俺らは確実に死ぬ。」

「大丈夫だよ。今までも大丈夫だったじゃん。」

木の裏にあって死角になる草むらに隠れた。

「それは運が良かったからだ。ずっとキルアがフォローしてくれてたしな。」

「…うそ。」

「いいか。俺らはまず修行するんだよ。」

偉そうだな。と少し思ったけど私はゆっくり頷いた。

「修行の前に俺らは一番弱いと思われてる。だから狙われやすい。」

「だろうね。」

「そこでだ。」

アクタが地面に絵を書きだした。

「どちらか負けた方がおとりになる作戦をしよう。」

私はアクタの頭を叩いた。

「修行は？どちらかがおとりになって捕まったら弱い私たちは勝てないよね。二人ともプレート奪われてゲームオーバーじゃん。」

「確かに。」

コイツ真面目に考えてないな。それか本気のバカなのか。

「と言うのはレベルアップの後の話にしよう。」

「話してる間にも何かできるよね。例えば、私たちの隠れ家見つけるとかさ。」

「よし。行こう！」

隠れながら移動してたらキルアと目が合った。

「よっ。」

「キルアで良かったぁ。」
「キルアは堂々と歩きすぎ。」

「二人とも気配全く消せてないじゃん。ヒソカに合ってたら終わりだぜ？」

頭の後ろで手を組みながら余裕シャクシャクなキルア。

「強くなりたいの。」

「カンナは俺が守るって言わなかったっけ？」

キルアの冷たい眼に一瞬背中が凍る。

「まぁまぁ二人とも。俺は先に行くからな。」

「私も行く！」

「勝手に応募してごめん。」

キルアは小さく呟いた。

どこも良い場所は誰かが使っていた。

「もうそんな時間たったか？」

「アクタが無駄話してたからね。」

「あれ！」

アクタが走りだした。

「ちょっと待ってよ。」

アクタが見つけたのは小さめの洞穴だった。前に木や植物のツルがあって遠目からは見つけにくい。山水も湧き出ていて良さそうだ。

「すごーい！けど先に見つけた人いないかな。」

「大丈夫だって。」

どうにか眠る場所は見つけられた。

ん？

待てよ。

「よし、修行するか。」

アクタと二人きりでは寝れない！

「早く行くぞ。」

「あ…うん。」

けど、一人で寝たらもっと危険なような。

ゼビル島初日から不安いっぱいになっていた。

師匠を探せ

「師匠？師匠になってもらう前にプレート奪われるよ。」

呆れたように私は言い放った。

「カンナいくら何でも俺に冷たくね？拗ねるべ？」

まずは思い浮かぶ人物を言い合う事にした。

「ハンゾー。」

「あぁ。あの忍者ね。絶対教えてくれないよ。」

「なんでだよ。修行って言葉が似合うじゃん。」

口を尖らせるアクタ。ちょっと可愛いのがムカつく。

「ハンゾーは目が笑ってないからパス。」

「カンナは誰がいいんだよ。」

「キルア。」

「キルアはダメだろ。てかさ、カンナが私頑張るって言ってたじゃねぇか。」

「分かってるよ。」

洞窟の中は声が響く。歌を歌ったら上手く聞こえそうだ。

「じゃ、パンツマンに任せろ！」

「パンツのオッサン！」

「ぱ…んつ？ちょっとアクタ、あの人危ない人？」

見た目は優しそうな花屋のおじさんに見える。白い顎ひげが似合って笑顔も爽やかな方なんじゃないかな。

「お嬢ちゃんのパンツは紐パン？」

「え？」

「アホか！お前なんかに修行して貰ったら頭ん中パンツでいっぱいになるわ！」

「それでいいんです。」

いきなりキャラが変わったんだけど。

でも気配もなく洞窟に入って来た。まさかカ●仙人的なエロいけどめっちゃ実力者とか。

「くぁー！さ、寝るか。」

「何しに来たんだお前！」

「昨日徹夜でさ。とりあえず、反復横跳びやれば？」

「アクタ行こう！」

「お嬢ちゃん逃げるのか？」

逃げるってワードにカチンと来た。

「誰が逃げるって？」

「俺が寝返りするまで反復横跳びだ。反対に寝返りしたら、腹筋背筋セット。」

「腹筋から背筋の流れなんて不可能だろ。」

「いいから始めなさい。はじめ！」

洞窟での修行なら確かに安全だけど。

「お嬢ちゃんもっとダイナミックに！」

目を瞑りながら怒鳴られびっくりした。

「ボクサー！お嬢ちゃんを気にしすぎ！」

「ちがっ！！」

パンツ師匠はなかなか寝返りをうってくれない。

だんだんと汗が滲み出て来た。

「カンナ…大丈夫か？」

「アクタこそ息荒いよ？」

「ぐぉー…。ぐぉー…。」

「まさかコイツ寝てねぇよな？」

「ソイツ寝てるよ。」

…。

「キルア！？」

「いつからいた？」

「けど。ソイツ、タダ者じゃないな。」

「パンツが？」

「カンナが大丈夫そうで良かった。じゃ、またな。」

キルアは素早くいなくなった。

「寝返りしたぞい。腹筋背筋をしろ！」

「しゃあない。頑張るか。」

「キルアが認めたしね。」

キルアに会えた事が嬉しくて元気が出て来た。

「あの銀髪小僧…いつかお嬢ちゃんたちを殺すな。」

師匠の言葉は二人の耳には届かなかった。

仮面を被れ

一日中筋トレをした。そして次の日。

「逃げられないと思うヤツを答えろ。」

師匠はいきなりこう言い出した。

「ヒソカ、ハンゾー。」

「私はアクタと同じ人プラス…ギタラクル。」

どんな極意を教えてくれるんだろう。

「逃げられないなら戦意喪失を狙え！すなわち、自分を弱く見せるのだ。」

「意味分かんねぇよ。」

「仮面を被れ！」

パンツパンツ言ってた男にいきなり真面目な事を言われても違和感しかわかない。

「おかしいだろ。俺らは元々弱いんだから更に弱く見せてどうすんだよ。」

「いいか。根拠の無い自信ほどの自殺行為はない。」

ゆっくり頷くアクタと私。

「自殺行為になるなら公開処刑がいいだろ？」

「どっちにしろダメじゃん！」

「パンツ親父！時間を戻せ！」

……

「うーん。なーんか違う。」

木に目標をつりさげ、釣り糸を引っかけるゴン。

「ヒソカはこんなじゃない。」

ゴンは大の字になって寝転んだ。

その頃のレオリオとクラピカは。

「あとはポンズだな。」

「まーったく。俺のお姫様はどこ行ったんだよ。」

「お姫様？」

クラピカは軽蔑の目でレオリオを見た。

そしてキルアは…。

「4次試験開始から俺の事付けてんのバレバレだぜ？出て来いよ。遊ぼうぜ。」

と言うふうに付けて来た男を挑発していた。

果たしてハンターになれるのか！

次回へ続く。

体力より頭脳

「で。どっちがかくれんぼ上手い？」

師匠がふいに質問して来た。

「そりゃ、カンナだぜ。コイツが隠れて見つけたヤツはいねぇよ。」

「じゃあお嬢ちゃんが見張りな。」

「え？」

「あんちゃんがオトリだ。」

あと2日のところで師匠は真面目に語り出した。

「基本的にあんちゃんがプレートを狩る役目だ。お嬢ちゃんは、敵の後ろで観察しながらピンチの時は助ける。」

そして私たちはようやく洞窟から出た。自分たちの狩る相手が狩られていないのを祈りながら。

「見つけられなかったらどうしよう。」

「バーカ。俺らの運なめんな。」

人の気配がする。私とアクタは目を合わせ頷いた。

「あれ？ゴンじゃん。」

「だめ。」

よく見るとゴンは何かタイミングをはかっている。私は木に登った。

「ヒソカ…ね。」

「カンナ。それ良い考えじゃねーか。木の上を移動しようぜ。」

「ん。」

ゴンも戦ってるんだ。鳥肌が立って来た。

「いたぜ。」

アクタの狩るナンバーの持ち主を見つけたようだ。

３６２番のケンミ。
坊主で目の細い小柄な青年だ。

「あれ？覚えてないんじゃなかったの？」

「思い出したんだよ。たまたましゃべったことが…って、行くぞ。」

正面からケンミに勝負をかけるアクタ。私は少し離れた場所でケンミの背中を見つめた。

「俺のターゲットお前なんだけど、プレートちょうだい。」

「はいとは言わない。」

睨み合う二人。アクタから正拳突きをしかけた。

「なかなかやるな。」

ケンミの動きは素早い。このままじゃアクタが危ない。

「カンナ。今だ！」

「なさけないけどしょうがないよね。」

私は一直線に走ってケンミの背後からプレートを奪った。

そして二人して死ぬ気で走った。

「はぁ…はぁ。」

「もう来ないな。」

湖の近くで休むことにした。

「え？プレート3枚あるよ。」

「マジかよ！じゃ、あと一つ狩ればいいんじゃん！」

「怖いくらいラッキーだね。」

あと1日。
そう簡単にプレートは手に入らない。
目標をクリアしているアクタを少し羨ましいと思った。

危険と刺激は隣合わせ

ダン！
アクタが木を殴り、数羽の鳥が飛んでった。
「バカだバカだとは言って来たけど、カンナがそこまでバカとは思わなかったぜ！」
「木に当たらないでよ。」
「ともかく、一人じゃ無理だっつってんだろ？師匠も怒るぞ。」
「私…一人でやってみたいの。プレートも棚ぼたが2枚もあるってことはチャンスなんじゃないかな。」
「ともかく俺はもう知らねーからな。」
踵を返し何処かに行くアクタ。私は大きく深呼吸してから一歩踏み出した。
誰かに頼らずに一人で何かをやってみたい。せっかくこんな冒険が

できるんだから刺激が欲しい。

「ぐっ…。」

前方に誰かがお腹を抱えて唸っている。

「大丈夫ですか？」

「甘いな。」

後ろから足を引っ張られ、バランスを崩して転んだ。

「やっぱ弱いのはお前だな。」

「トンパさん！」

「プレートは頂くぜ。」

もう一人足を引っかけたヒョロい人が出て来た。

この二人はきっと取られた後だ。

「そこに落ちてただろ！」

「へ？」

起き上がると手元に１９７番が落ちていた。

「早くよこせ！」

二人が同時にかかって来た。私は反復横飛びの動きでどうにか避けた。

「女の子一人に二人はあり得ないでしょ。」

そして全力疾走。

「わ。時間無いじゃん！」

ゴール（スタート地点）を目指した。

「あー！カンナだ！」

ゴンが手を降ってくれてる。けど、アクタがいない。

着いてからゴンに聞いた。

「アクタは？」

「アクタは…」

「ぶっ！ここに隠れてるぜ。」

レオリオの後ろに隠れるアクタ。

「バカ！もう…心配させないでよね。」

「バカはどっちだよ。まぁ、信じてたけどよ。」

ヒューヒューなんてレオリオに言われた。

「早く乗ろうぜ！」

キルアの一言で飛行船に乗った。

飛行船に乗って

なに。あのハイタッチ。

「カンナ…お前睨みすぎ。ゴンはキルアにとって特別なんだから仕方ねぇだろ。諦めろ。」

アクタが座ってこんな事を言い出した。

「アクタはいいの？キルアと友達になるのが私たちの目的でしょ。」

「お前ら友達じゃねぇのかよ。ダチって確認する必要ねぇ繋がりだろ？」

レオリオがいきなり話に入って来た。あのサングラス意外と高そう。

「女性は安心感が欲しいのだよ。」

「クラピカ分かるー！」

クラピカに近寄ってみる。

「少なくとも私はカンナを友達だと思っているつもりなのだよ？」

「クラピカらぶー！」

「あーあー。キルアのヤツ乗り換えられてるぜ？アクタは良いのかよ。」

「最後に笑うのが俺ならいいんだよ！フンッ。」

レオリオとアクタの声も聞こえてたりする。

「ねぇキミ。」

ヒソカがいきなり話しかけて来た。

「私？」

「ちょっとボクと遊ばない？」

トランプをきるヒソカ。

「カンナはやらねぇよ。」

最初にレオリオが私をかばった。

「私もカンナと二人きりにはさせない。」

「なんでカンナなんだよ！ギタラクルと遊べ！」

何か私、お姫様みたいになってるんだけど。なんて自惚れてみたり。

「残念。」

ヒソカはいなくなった。

「みんな！どうしたの？」

ゴンが走って来た。

「どうせ、ヒソカに誘われたカンナを守ってたんだろ？」

キルアの言葉にアクタが怒った。

「俺を放置すんのは良いけど、カンナをほっとくんじゃねーよ。」

「…。」

二人は睨み合う。

「なんか部屋に集まれって！」

誰かの声でみんな部屋に向かった。

「アクタ…。」

「ん？」

「キルアはキルアなりに考えてくれてるから。そんなに泣きそうな顔しないで？」

「バーカ！カンナの前では絶対泣かねぇよ。」

強引に頭をなでられ、笑ってしまった。

飛行船の旅は続く。

ネテロと面談

「何で俺から？」

アクタは独り言を言いながらドアをノックした。

「入ってよいぞ。」

ガチャ…

「失礼しまー…。って！なんでパンツ師匠がいんだよ！」

ネテロ会長と仲良さげに話しているパンツ師匠。

「スルガから話は聞いとるぞ。飛び抜けて運が強いらしいのう。」

「スルガ？」

「そ。俺はスルガって名前なの。」

自己紹介遅れすぎだろ。

「1臆分の1。」

「はい？」

「スルガと受験生が会える確率じゃ。」

「そんなに？」

黙っているスルガはニヤリと笑った。

「お前さんだけ合格にしても良いくらいだけどそれじゃちとつまらん。」

「いや、合格で！」

「助っ人としてスルガを付けてやろう。もう良いぞ。」

パタン

「俺何も質問されてねぇじゃん。」

「俺が守ってやるよ。」

「スルガいらねぇ！」

次はヒソカが呼ばれた。戦いたい相手と戦いたくない相手をそれぞれ聞かれ、９９番のキルアが戦いたい相手。４０５番のゴンと答えた。

次にカンナが呼ばれた。

「失礼します。」

「ふむ。異世界から来たヤツとは何回か会った事はあるが、お前さんは変わった雰囲気じゃのう。」

「さすが会長さん。気付いてたんですね。」

「まぁ、座んなさい。」

言われるままに座った。

「今回はヤバいぞ。」

「今までもギリギリでしたからね。」

「友達を作りすぎたのう。」

「そう見えるなら良かったです。」

「相棒と協力しなさい。ヤツは強運の持ち主じゃからのう。」

パタン…

「あれ？みんな質問されたって言ってたのに私質問されてない！」

ショックを隠せないカンナでした。

「スルメのおじさん！」

「ほら、スルメだよ。」

「やっぱ美味いなこのスルメ。」

ゴンとキルアが無邪気にスルメを食べていた。

暗殺者は忘れた頃にやって来た

トイレに行こうと思い、飛行船の通路に出た。

と。ギタラクルと目が合う。

「カタカタカタカタ…。」

うわ。相変わらず不気味。

が。次の瞬間男子トイレに連れて行かれた。

殺られる！！

シュルルル…ギタラクルは顔や頭に刺さる針のようなものを抜き出した。

「はぁ。スッキリした。」

「あなたは…イルミさん？」

黒髪ロングに冷たい目。顔は美形だ。

「そ。そろそろ俺の宝物を取り返そうと思ってね。アクタとか言うヤツのガードマンが邪魔で話しかけられなかったよ。」

パンツ師匠の事だ。

「キルアに貰ったので返せません。」

「ふーん。じゃあ君を殺すよ？」

ゾクゾクッと背筋が凍った。冷や汗がコメカミを伝う。

だってこの人本気だもん。

幸い私は出口側にいる。でも動いたらもっと危険な気がして来た。

「オイオイ…。男子便所で何してんだ？」

何も知らないレオリオが入って来た。レオリオまで危ない！

振り返るとイルミはいなかった。

「あはは。間違っちゃってさ。」

「大丈夫か？汗スゲーぞ。」

怖かった。あんな怖い人間が存在するなんて信じられない。
それに、キルアのお兄さんなんだよなぁ。

一人行動は危ない。ひょっとしたらこの上羽竜の牙を渡せば良かったのかも知れない。

「佳奈ちゃーん？俺今から小便するよ？」

「あー、今出るよ。」

シリアスムードがレオリオの陽気な声のせいで台無しだ。

イルミの事アクタに伝えなきゃ。でもパンツ師匠がついてるから言えない。

「あー！カンナいたよ！」

「ったく。勝手にいなくなんなよな。」

ゴンとキルアが前から歩いて来た。

「ごめん。トイレだったから言いづらくて。」

「キルアすっごい焦ってたよ。」

「おいゴン！」

「あはは！キルア真っ赤ー！」

イルミがキルアのお兄さんなんだ。なぜか胸が張り裂けそうだった。

「アクタは？」

「クラピカとスルガさんと一緒だよ？」

「へぇ。異色の組み合わせだね。」

この二人を見てると癒されてる自分がいた。少し前まではヤキモチ妬いてたけどね。

「心配かけんな。」

「ありがと。」

キルアが大人っぽく見えた。銀髪が、青い瞳が綺麗に揺れる。ハンター試験受けてからきっと成長してるんだ。

「ねぇキルアにカンナ！探険しよう！」

「いいぜ！」

キルアに手を取られ私も走った。

試験まではリラックスしよう。

自分に言い聞かせていた。

まっすぐな瞳

ゴンといるとスゲー楽しい。カンナは恋人志望でアクタはあったかい兄弟みたいなモンだって思ってる。二人には言わねぇけどね。

「キルア？」

「ん。今行く！」

ゴンの目は曇りの無い澄んだ目だ。殺しなんて無関係に育って来たんだろうな。俺と正反対だよホント。

「大丈夫？さっきからぼーっとしてるけど眠いの？」

大きな瞳が心配そうに揺れた。

「俺だって考え事もすんの。ゴンは大丈夫なのかよ。」

「俺？俺は今すっごい幸せだよ！空にこーんなに近いなんて信じられない！」

窓を見上げて両手を広げるゴン。その背中には羽が見えそうだ。

まぶしい。

俺にはゴンがまぶしいよ。

「ねぇキルア。」

「んー？」

「キルアはどんなところに住んでるの？」

「そうだな。山みたいな感じ。」

「山？」

説明するのがめんどくさい。

「カンナとアクタに聞けよ。」

「えー？キルアに聞きたい。」

まっすぐな瞳で俺をみつめるゴン。いやとは言えないな。

「結構土地は広いよ。なんか、観光地になってるしね。」

「へぇ！すごいね！」

「けど、俺んち変わってるからな。」

ゴンは首をかしげた。

「変わってるって？」

「殺し屋だからさ。」

どんな反応すんだろ。ちょっと面白かった。

「そうなんだ。」

「へ？そんだけ？」

「だってホントでしょ？俺んちはね、クジラ島ってとこにあるんだ。ミトさんとおばあちゃんと住んでる。」

やっぱかなわない。

なんか涙が出そうになった。初めて認めてもらえた。そんな錯覚をしたからだ。

「キルア？」

「そろそろ行こうぜ。カンナたちが待ってる。」

「もう！俺の話も聞いてよ！」

「はいはい。」

親友と思いたい君。

俺にはもったいない。そんな臆病な気持が俺を押し付けていた。

最終試験前に失格！？

あれ？キルアからもらった牙がない。

「アクタ。キルアにもらった爪持ってる？」

ズボンのポケットをあさるアクタ。

「うそ。無いんだけと…。」

まさかイルミに取られた？

だんだんと身体の力が抜けていく。立つ力もなくなった。

ドサッ…

「カンナ！」

「キルア…。私もうダメみたい。」

「アクタも倒れてるよ！どうしたの？」

もう最終試験会場に着くところだった。

「異世界から来た人は特殊な能力によって支えられない限り倒れてしまうらしい。」

とスルガが冷静に言った。

「特殊な能力？まさか…、上羽竜の爪や牙によって保たれてたのかよ。」

「キルア、どういうこと？」

「話が全然読めねぇぞオイ。」

「…まさか二人は異世界から来たというのか？」

レオリオとクラピカも混乱している。

「特殊な能力なら僕が分けてあげる。」

トランプタワーを作っていたヒソカがゆっくりカンナに近づいた。

「おい！何してんだよ！」

キルアが叫んだ。

「キス？」

「手を繋ぐだけで大丈夫だ。」

「残念。」

カンナの手にヒソカの手が触れた。

真っ青だったカンナの頬に赤みが出た。

「おしまい。」

「ありがとうヒソカ。」

「いやいや、アクタがまだ死にかけてるから。」

「カンナはライターくれたから助けたけど。ねぇ。」

アクタがピンチ！

「あ、俺にも能力あるかも。」

スルガがアクタのおでこに触れた。アクタの顔色も治った。

「二人とも試験に間に合いそうで良かった。」

クラピカが胸をなでおろした。

「ハンター試験なんてけた外れな奴らばっかの集まりだから異世界なんて関係ねぇよ。」

レオリオも二人に優しい言葉を放った。

「どこから来てもカンナはカンナだし、アクタもアクタだよ。」

「良かったな。宇宙人扱いされないで。」

「キルアはたまたま上羽竜の牙や爪をくれたんだよね？」

「…考えたくねぇな。」

特殊な能力のエネルギーをもらわないとここに立ってられないんだ。

初めて、異世界の怖さを知った。

最終試験

「最終試験は1対1のトーナメント形式で行う。その組み合わせはこうじゃ。」

ネテロ会長により極端なトーナメントの表が現れた。

みんな反応に戸惑う。

「さて最終試験のクリア条件だが、いたって明確。たった1勝で合格である!!」

「ってことは。」

「つまりこのトーナメントは勝った者が次々抜けていき敗けた者が上に登っていくシステム!この表の頂点は不合格を意味するわけだ。もうおわかりかな?」

「要するに不合格はたった一人ってことか。」

ハンゾーが質問した。

「さよう。しかも誰にでも2回以上の勝つチャンスが与えられている。」

ガチバトルってことだよね。私には色気しかないじゃん！

カンナは心の中で真剣にボケていた。

「ガチンコバトルかよ！俺にはカッコ良さしかねぇじゃん！」

少し遅れてアクタがボケた。周りから冷たい視線を浴びながら気にしていない様子。

「身体能力値。精神能力値。そして印象値。これから成る。つまり重要なのは印象値！簡単に言えば成績のいい者にチャンスが多く与えられていると言うこと。」

さっきからキルアが悔しそう。ゴンをライバル視してるからね。

そういう私はビリから3番目ってとこか。アクタは…上から3番目！？嘘！！

「やっぱ印象値だな。」

「アクタおかしいだろ！」

「へっ！レオリオ。俺がそんなに羨ましいか？」

「なんだとー！」

「まぁ。レオリオ。アクタは強い相手と最初に戦わないといけないのだよ。」

「頑張れよアクタ！」

そんな能天気なやり取りが続いた。

けど、ゴンとハンゾーの試合を見ることによりこの雰囲気は緊張感に変わった。

「ゴン！」

目をふせたくなるほどのハンゾーの攻撃。

ボクシングとかそういう試合とは違う何かを感じた。

でもゴンは敗けを認めなかった。

「いやだ！」

フラフラなのに。もう見るからに敗けてるのにどんな精神力なんだろう。

「アホかー！」

ハンゾーがゴンを殴り飛ばした。

「俺にはコイツを殺せない。おい審判、俺を不合格にしろよ。コイツが起きたら合格を辞退するってきかねぇだろうが、もう俺が不合格だ。」

ゴンは控え室につれてかれた。

「ゴンはスゲーな。」

「ん。私には真似できないよ。」

私は鳥肌が立っていた。ゴンの戦い方に強さを感じたからだ。

アクタ対ハンゾー

ゴンはスゲーよ。力だけじゃなく、全てを認めさせたんだ。

けど、関心してる暇はない。なぜなら、順番で行くと俺の相手ハンゾーなんだから！

「次はクラピカと、ヒソカだね。」

「能天気だなオイ。」

「レオリオ緊張してるの？」

「あんな試合見たらそりゃ…ちょっとは緊張すっだろ？」

カンナとレオリオの会話が聞こえる。キルアは…また悔しそうな顔だな。

『なんでわざと負けたの？』

『あんたなら勝てたはずだよね』

キルアのあの言葉に正直ついていけなかった。ダチになりたいとか言っといて自分勝手だな俺。

クラピカとヒソカの試合はすぐ終わった。ヒソカがクラピカの耳元で何か囁いて、ヒソカが敗けを宣言したからだ。

もう少し長くして欲しかった。

「次の試合はハンゾー対アクタ！」

ハンゾーの目が違う。こえー。俺も骨折られっかな。

「はじめ！」

「ラッキー少年らしいなお前。」

「自分じゃ自覚ないんだけど、少なくとも今はラッキーとは言えねぇかな。」

忍者にはかなわない。けど、ゴンはゴンらしく戦っていた。

どうすりゃいい？

「俺になかなか隙を見せねぇとはなかなかやるな。」

「忍者って初めて見たけど、威圧感ハンパねぇすね。」

怖い。

本気で戦うってこんなに怖いんだな。

「今からが本番だ。」

簡単に後ろを取られた。さっきのは嘘かよ。

「俺には簡単にお前を殺せる。」

「そうだろうな。会った時からお前の独特の雰囲気大嫌いだから。」

グッ…と右手を背中に押し付けられた。もう折れたんじゃねぇかってくらい痛い。

「お前は負けだ。」

「負けたくねぇよ。こんなんで負けてたらキルアに認めてもらえねぇんだよ！」

「…。お前はまだまだ強くなるぜ。」

ダメだ。力入んねぇ。もう限界だ。

「まいった。」

俺はこう口にしていた。悔しい。

悔しい悔しい！

「バカ。何泣いてんだよ。」

「キルア…。やっぱ俺なんて友達にしたくねぇよな？」

「まぁ、アクタは友達より家族って感じかな。」

「キルア！」

こんなに笑ってるキルアを見るのはこの時までだったかもしれない。

キルアは次の試合で変わった。

まるで闇に包まれて一人ぼっちになったようにキルアは遠くに行ってしまうんだ。

キルアの家族

第6試合のレオリオとボドロはレオリオがボドロの怪我を理由に延期した。

そしてキルアとギタラクルが戦うことになった。

「久しぶりだねキル。」

「!?」

「あ、上羽竜の爪と牙返して貰ったから。」

ビギッ…ビギッ

ギタラクルは針のようなモノを顔や頭から取っていった。

「兄…貴…!」

そう言うキルアの声はもう震えていた。ミルキはその綺麗な顔だちからさらに雰囲気が冷たく感じた。

「や。」

「キルアの」
「兄貴…？」

クラピカとレオリオもその変形マジックに驚きを隠せない。

「母さんとミルキを刺したんだって？」

「まぁね。」

イルミは淡々としたしゃべり方をしている。キルアは冷や汗がすごい。

「母さん泣いてたよ。」

「そりゃそうだろうな。息子にそんなひでー目にあわされちゃ。」

「レオリオ黙れよ。今キルアが家族と話してんだぜ！」

あぁ。アクタがよく分からないけど興奮してるよ。

「感激してた。『あのコが立派に成長してくれてうれしい』ってさ。『でもやっぱりまだ外に出すのは心配だから』って、それとなく様子を見てくるように頼まれたんだけど。」

腹話術か！ってくらい口が動かないよイルミ。

「奇遇だね。まさかキルがハンターになりたいと思ってたなんてね。それもよく分からない二人を引き連れて。」

私とアクタの事だ。

「実は俺も次の仕事の関係上資格をとりたくてさ。」

「別になりたかった訳じゃないよ。ただなんとなく受けてみただけさ。」

あんなに緊張してるキルア初めて見た。蛇に睨まれたカエルみたいに縮こまってる。

「…そうか。安心したよ。心おきなく忠告できる。お前はハンターに向かないよ。お前の転職は殺し屋なんだから。」

キルア…。
なんで黙ってるの？いつもなら余計なことまでペラペラ話すのに、どうしちゃったの？

「闇人形ってなんだよ。」

「アクタ…。」

アクタもキルアが傷つく姿は見たくないんだ。

「ゴンと…友達になりたい。もう人殺しなんてうんざりだ。普通にゴンと友達になって普通に遊びたい。」

「無理だね。お前に友達なんてできっこないよ。」

なんでだろ。イルミの言葉が頭に響いてる。まるで催眠術をかけられてるように…感情移入してしまう。

やだ。私なんで泣いてるの？

レオリオがイルミに近づいた。

「ゴンと友達になりたいだと？寝ぼけんな！とっくにお前らダチ同士だろーがよ！少なくともゴンはそう思ってるはずだぜ！」

「少なくとも俺はキルアをダチだと思ってるぜ！」

…アクタまで。バカだなぁ。なんか心が温かくなって来た。

「え？そうなの？そうかまいったな。もう友達のつもりなのか。」

アクタがちょっと引いた。

「よし。ゴンを殺そう。殺し屋に友達なんていらない。邪魔なだけだから。」

キルアがふるえてる。

「彼はどこにいるの？」

この人は違う。

イルミを見てそう感じた。本気で殺そうとしてるって確信した。

扉の前にクラピカ、ハンゾー、レオリオが立ちはだかる。

「アクタ。どうする？」

「俺はキルアが心配だ。アイツ、今にも倒れそうな顔してるぜ。」

色白なキルアの顔がさらに青白くなっていた。

キルアの友達なら殺されるの？だからキルアは友達って確認できなかったんだ。

キルアが『まいった』と言った。

それは紛れもなくゴンへの裏切り。だってイルミは『合格してから殺そう』って言ったから。

でもイルミは冗談だと言った。

それからキルアは変わった。

話しかけてもただ天井だけを見ていた。

キルア…ハ
ココニイナイ

「キルアがいなかったら俺たちはここにいないのに。」

「しょうがないよ。今はそっとしよう？」

そしてキルアはボドロを後ろから刺した。わざと失格になったかのように思えた。

「キルア！」
「キルア待ってよ！」

私たちはキルアを追いかけた。キルアが殺人鬼でも悪魔でも私たちは追いかけるしかないから。

「あんなに脅したのにまだキルに付きまとうなんてね。」

「アイツらはな、そんな簡単な関係じゃねぇんだよ！」

「そう。友達とか言葉でくくれぬ関係もあるのだよ。」

レオリオとクラピカはイルミを睨みつけた。

君がいなかったら

もしもキルアと出会ってなかったら私とアクタはハンター試験も受けてなくて。

洞穴から来た時、ミケに食べられてたんだろうね。

「なぁ。キルア見失ったら俺らヤバいよな？」

「お金も持ってないしね。」

キルアは速歩きで町を歩いている。私とアクタは走って追いかけてるところだ。

「もうムリだー！」

アクタが立ち止まった。

「ちょっとアクタ！置いてくよ。」

「なんでカンナは平気なんだよ！俺ら特殊な力を貰わねぇと倒れるんだぜ？」

確かにおかしい。
そういえばキルアに犬笛貰ってたんだっけ。

胸元の笛を見ると、キルアに貰った時になかったはずの赤いリボンがくくりつけてあった。
そのリボンに文字が書いてある。

「特殊な能力がある人が付けてくれたのかな？アクタも触って。」

アクタは犬笛を触った。

私はゆっくり犬笛を吹いた。

「そんなんでよく最終試験まで行けたよな。」

振り向くとキルアがいつものようにニヤリと笑った。

「良かった！いつものキルアだな！」

「別に俺は普通だけど？」

「今からどこ行くの？」

キルアは私の目をじっと見た。

「二人は戻ったら？俺が失格なんだから試験は合格なんだぜ。」

「関係ないよ。私には…」

「キルアがいねぇと意味がねぇの！」

アクタも同じだったみたい。

「俺は今からウチに戻るつもり。二人がウチに来たら帰っちゃう気がして正直、やなんだよなぁ。」

「キルアの行くままに！」

「俺も！」

「ちょっと急ぐけどついて来れるかな。」

良かった。キルアが笑ってる。もう笑顔は見れないかと思った。

この時、赤いリボンの事など忘れ去っていた。

目指すはキルアのウチ、ゾルディック家へ！

友達とかよく分かんないけど

カンナとアクタは俺が人を殺そうが今隣にいる。怖くねぇのかな。

右隣のカンナを見ると微笑んだ。

左のアクタを見ると…

「ん？迷ったか？」

と心配そうに俺を見た。

「お前ほど方向性に迷いはないよ。」

「は？」

「髪と目黒がいんじゃない？」

アクタは真っ赤になって黙った。

「アクタはね、キルアになりたいんだよ？金髪に青い目だけどね。」

「ねぇ。俺人殺しだぜ。二人とも怖くないの？」

俺が立ち止まると二人は振り返った。
ちなみに俺は常にポケットに手を突っ込んでる。

まぁ、ホントはうっすら手に汗かいてんのはバレたくないんだよね。

「怖くないよ。現実に戻れない方がむしろホラーだから！」

「あっそ。アクタは？」

「キルアなら何でも有りっス。」

「ふーん。この列車に乗るから。」

「なかったコトにされたー！」
「まぁ照れ隠しだよ。な？キルア。」

照れ隠しとかの前に、期待した俺がバカだったぜ。

「ほら、切符買ったから自分で持ってよ。」

「サンキュ。」
「いつ買った？」

いつ買った？ねぇ。
ま、俺の速さに追いつけるはずないけどさ。

「キルア。ゴンたちとは会えないのかな？」

カンナは列車を待ってる間に旅人っぽい服から制服に着替えて来た。
なかなか可愛いじゃん。

「一緒にいたいけどさ。もう失格だし戻らない。」

「列車が来たぜ！」

「きっとゴンとはいつか会えるよ。…って柄じゃないけどね。」

今までは自分の気持ちを言っても無駄だと思った。でも今は伝えたいと思える人がいる。

二人がいてくれて満たされるんだよね。

カッコ悪いけど

もう一人は嫌だ。

まだ帰んなよ

ガタンガタン…

「あー！キルアんちが見えてる！」
「さすがゾルディック家だな！」

「ったく。二人ともハシャギすぎ。」

なんだかんだでキルアは嬉しそうだ。自分の家を褒められたら嬉しいもんね。

「次、降りるよ。」

キルアに言われ私とアクタは窓の景色を見た。

「景色とか変わんねぇのに違うんだよな。」

「ん。私たちのいるべき場所じゃないんだね。」

「……。」

この時初めてキルアと距離を感じてしまった。

「ほら、降りるよ。」

「ん。」

キルアの敷地に入ったらあの岩のある水辺に行ける。そしたら私とアクタは帰れる。

帰れる、はず。

色々考えてると、キルアが近道してくれたのか“試しの門”に着いていた。

「二人から試したら？」

「えー？俺もすんの？」

「はい。アクタからね。」

キルアはニヤリと笑った。相変わらずポケットに手をいれている。
アクタは守衛さんに一礼してから大きく深呼吸。
「おりゃー！」
ゴ…
「動いた！アクタあとちょっとだよ！」
ゴゴゴゴ…
「開いたぜ！お先！」
アクタは1の扉つまり両手で4トンを押し開けた。
「カンナはどうする？手伝おっか？」
「いい。やってみる。」
ハンター試験で鍛えられたから自信はある。

「すーはー。」

深呼吸して守衛さんにぺこっと軽く頭をさげた。

「いくよ。」

目をつぶって両手を扉に当てる。

そして

一瞬力を抜いてからフッと力を出した。

ググッ…

「ひ…ら…けー！」

ゴゴゴゴゴゴ…

「やるじゃん。」

私も1の扉だったけど、入れた。まだドキドキしてる。

「やったじゃんカンナ！」

「ん。」

ハイタッチした。

次のキルアの音は地響きが凄くてまるで地震が来たような音だった。

そしてキルアは3の扉、つまり16トンを開けた。

「んー。腕訛ったかもしんない。」

「すっげー！さすがキルア！」

「ホント頼りになるよ。」

「当たり前じゃん。」

キルアは強くてヒョイっと何でもできる器用な男の子って思ってた。

しばらく歩くとまたキルアが立ち止まった。

「ねぇ。まだ帰んなよ。」

「え？」

「俺の部屋とか興味ない？」

「見てぇ！」

そう。キルアは一人になりたくない普通の男の子だった。

キルアの部屋

「ねぇキルア。私たちが入ったらさ、殺されるんじゃない？」

「んー。まずヒステリーババァに追いかけられるかもね。」

「ヒステリーババァって誰だよ。」

だんだんと森を抜けて来た。すると綺麗なお屋敷が見えた。

「母親。」

キルアがそう呟いた。

「お帰りなさいませ。キルア坊っちゃま。」

執事らしき人がズラリと並んで頭を下げている。

「ゴトー久しぶり！」

「はい。1ヶ月ぶりでございますね。」

なんかゴトーさんって人、ちょっと怖そう。

「こいつら俺の…」

ドキドキ…

「弟子だからさ。俺の部屋に入れるね。」

「坊っちゃまの弟子ですか。かしこまりました。奥様に伝えておきます。」

「よろしく。」

そしてキルアは通路に戻った。

「あれ？今のがキルアんちじゃないの？」

「まさか。俺んちアレだよ。」

キルアが指差した方を見上げると、大きな山が見えた。

「いやデカい山しか見えねぇよ。」

「まぁ、簡単には見つからない場所だよ。俺んち暗殺者の家系だから家がすぐバレたらヤバいしね。」

「なるほど。」

トントンと後ろから肩を叩かれた。

振り向くと。

「お二人はアイマスクご着用でお願いします。」

「ゴトーさん。」

「ずっとつけられてたぜ？」

キルアがニヤリと笑った。

しぶしぶ黒いアイマスクを付けるアクタと私。

「俺の弟子なら転ばないよ。ゴトーもういいから。」

「…かしこまりました。」

そんなわけで目隠しで歩いてる。

キュッ…

いきなり手を繋がれたぁ！

「こっち。」

と導かれる手。

「アクタは？大丈夫？」

「俺の腕に捕まってるから大丈夫じゃねぇの？」

「今何か足に登った！！キルア！キルアぁ！」

「ん？ただの毒蜘蛛じゃん。アクタって弱虫だよなぁ。」

いや、ただの毒蜘蛛って変でしょ。

「ちなみにこの森にいる虫や植物はほぼ毒だからね。」

「知らなかった。」

「知らねぇ方が良かった。」

「もう着くよ。」

そして、キルアはアイマスクのままの私とアクタを部屋に置いてどこかへ行ってしまった。

「ちょっと用があるから。俺が戻るまでアイマスクとらないでね。」

と一言残して。

5分後。

「カンナ。」

「ん？」

「トイレ連れてって。」

「やだよ。道分かんないし、一歩出てキルアの家族に会ったら命はないよ？」

こうして時間は過ぎていった。

ガチャ

「あー、疲れた！おまた…。」

すぅーすぅー

くかぁくかぁ

「1日たったしね。」

キルアはベッドに二人を運び、アイマスクを外した。

「おつかれ。」

少年は一人微笑んだ。

おぼっちゃま

いつの間にか寝てた私は、最後に目が覚めた。

「すっげーイビキ。」

呆れるキルア。アクタは爆笑してるし。

それより何より。

「何！この広い部屋！」

「俺の部屋だけど。」

「しかもキルアの部屋って何でもあんだぜ！ゲームとか漫画とか…。」

「違う。これはブタ君からパクったやつ。」

ブタ君？また分からないワードが増えた。

広いのを除けばキルアの部屋はちょっと散れている普通の男の子の部屋だった。

なぜか部屋暗いし窓少ないけど。

「あんまりジロジロみないでね。特にカンナ！俺の部屋なんて何もないって。」

「アクタの部屋の方が汚いね。」

「俺は忙しいからなんだって。」

少し安心した。

「そういえば用事って何だったの？」

「…ゴン達が来てる。」

「マジで！？良かったな！」

アクタが喜んでいるとキルアがアクタを鋭く睨んだ。

「俺の家族…冗談通じないからさ。助けに行こうと思うんだけど、二人はどうする？」

「私も行くよ。」
「当たり前だろ！」

「はぁ。その前に二人の事がバレたらヤバいしなぁ。ちょっと考えさせて？」

キルアはなんと！ゲームをしだした。しかもＲＰＧ。

「カルトは頼れねぇし。アルカ…っていないか。あぁ、帰せばよかったかなぁ。」

手の動きは休む事なく、キルアは一人悩んでいた。

「けど、ここにいたら見つかるのも時間の問題だし。」

キルアが考えてます。

「んー。あと少しでラスボスなんだよなぁ。」

ん？

「ちょろいじゃん。」

「キルア！ゴン達に会いに行くよ。」

「…実はもうゴトーがかくまってくれてるから大丈夫。」

「さすがキルア！一生ついてくぜ！」

キルアはラスボスを倒してから、私たちにまたアイマスクをしたのだった。

「ホントは来る時家族とすれ違ってたんだけどね。」

「え？」

「誰とだよ！」

「それは内緒。」

ま、キルアの部屋が見れたからよかったけど。すれ違った家族が気になってしょうがなかった。

正解は…

カルトちゃんだったらしい。

後から聞いたんだけどね。

君の選択

アイマスク越しでもキルアが嬉しそうな足取りで歩くのが分かる。

けど、私はキルアと別れるタイミングを言い出せずにいた。

「もう良いぜ。」

アイマスクを取ると執事のお屋敷が目の前にいた。

「ゴーン！」

キルアが叫んだ。そしてお屋敷に入ってく。アクタも続いた。

「行くぞカンナ。」

「アクタはいいの？このままじゃ戻れなくなるよ。」

「バーカ。キルアは分かってるよ。」

手を引かれ執事の屋敷に入ると、ゴン達とキルアが談笑していた。

「あ！アクタにカンナ！」

「キルアんち入ったんだってな。どうだったよ。壷とか置いてたか？」

「レオリオ。君は欲の塊だな。」

ババッと賑やかに話されて少ししか離れてなかったのに懐かしさを感じた。

「キルアの部屋はね…」「カンナ。」

キルアに止められた。

「ねぇみんな。それより行こうよ。」

ゴンの一言により私たちはキルアの土地を離れた。

そして分岐路。

「じゃ、これから俺は医者を目指すぜ。」

「私は同胞のカタキを討つ。」

「俺はとりあえず家に帰ってミトさんに知らせるよ。キルア達も来るよね？」

「…良いけど。」

「私とアクタは自分の世界に帰るよ。」

視線が私に集まった。

「こっちの世界の時間が進んでもカンナの世界の時間は進まないんでしょ？ならいいよね！アクタ！」

「あー、まぁ俺は良いけどカンナがキツいならカンナに合わせるぜ。」

アクタのバカ！
私が悪者じゃん。

「私が言うのは余計なお世話かも知れないが無理はよくないぞ。」

「ありがとうクラピカ。けど、ホントは自分の世界に戻りたくなくなるのが怖くて。だってみんなが大好きだから。」

ヤバい涙出そう。

「大丈夫だよ！カンナはそんなに弱くないよ。」

「そういや、男装もしてたしな。」

「レオリオ。男装は関係ないぞ。カンナ。私はまたカンナに会いたいと思っている。」

「おいおいクラピカ。俺は？」

私は大きく頷いた。

「分かった。まだみんなといたい。自分の気持ちに正直になるよ。」

円陣を組み手を合わせた。

「よーし！これは別れじゃないよね！始まりだ！」

ゴンの言葉にみんな重ねていた手を挙げた。

こうして私達はまた新しい旅に出た。

何にでも副作用はついてくる

現実の時間は進まないでいてくれるのはありがたい。ありがたいけど、自分は成長してるんじゃないかな。

例えば、アクタがこっちに1年いるとする。そしたら成長期の彼の身長が伸びないはずがない。すなわち、現実の一秒で身長が5センチ伸びることになる。

やっぱ帰るべきだよ。

「カンナは？」

元気よくゴンに聞かれハッと我にかえった。

「ごめん全然聞いてなかった。」

「もうカンナってば。あのね、釣りしたことあるかって話しになったんだ。」

クジラ島行きの船を待ってる私たち。暇だから雑談していた。

「あるよ。ちっちゃい頃はゴカイを手でつかんでたってお父さんが言ってた。」

「じゃあ釣りが苦手なのアクタだけだね。」

「アクタ根性無さすぎ。」

「今は大丈夫だって！多分。」

キルアに軽蔑の眼差しをされ焦るアクタ。
全く何も考えてないアクタが羨ましいよ全く。

「今度競争しようよ！誰が一番釣れるかさ！」

「じゃあ負けたヤツ罰ゲームな。」

キルアの目が光った。

「キルアの罰ゲームって変わってそうだよね。」

「ん？じゃあゴンの罰ゲームは何だよ。」

「木の上で逆立ち！」

「はぁ？針の山で親指立ちだろ普通。」

二人が盛り上がる中、アクタが私の隣に座った。

「俺もちゃんと考えてるから。そんな眉間にシワ寄せんな。」

「本当に考えてる？私たちはピータパンじゃないんだよ？」

「けど、見てみたいんだ。」

アクタの目がキラキラしてる。

「俺らの世界じゃできないことをもっとやりたい。ゴンやキルアとまだまだ知らない世界を見たい。って思わないか？」

「アクタ。あんたバカだね。」

「カンナ？」

こんな楽しい毎日じゃ学校生活に戻れなくなるよ。

「でも、私も相当バカみたい。」

これから先もっと危険なことばかりかもしれない。

でもワクワクする。

それはきっとゴンのイキイキした表情を見て伝染したモノなんだと思う。

「とりあえずこっちの文字から覚えよう。」

「やっぱ勉強かよ。」

「私たちはまだ学生なんだからね！」

「俺、キルアに教えてもらおう。」

「私がキルアがいい！」

二人でもめてる所を冷めた表情で見るキルア。

「なぁ、ゴン。」

「なぁにキルア？」

「男女の友情はあると思うか？」

「あるよ！けど、どうだろう。うーん…俺は有りだと思うかな。」

「ふーん。」

自分の意見を言わないキルアでした。

行き先変更

船に乗ろうとした時キルアにひき止められた。

「そういやゴン。金はあるか？」

私を船から降ろして、キルアはゴンに話しかけた。

「…うーん。実はそろそろやばい。」

「俺もこいつらの分まで払ってるからあんまない。そこで一石二鳥の場所がある。」

アクタと私は顔を見合わせた。

飛行船で向かったのは、天空闘技場。

地上２５１階。高さ９９１ｍ。世界第４位の高さを誇る建物。

「この飛行船の乗船賃で俺は全部使っちまった。あとは稼ぐしかない。船を降りたらゼロからのスタートだな。って！そこの二人。目をそらすな。」

ゴンは元気に返事をしたが私とアクタはテンションが低かった。

「もうキルアのお金に頼れないんだね。」

「異世界から来たっつーコネはなくなるわけかい。」

「二人ともキルアに借金があるんだね。」

「そ。まずは俺に返してからだぜ。」

こうして私たちはめちゃくちゃ高い建物に入った。

が。

「すごい行列だね。これ全部参加者なんだね。」

「うわっ。ムサッ！」

「ハンター試験と違ってこ難しい条件は一切なし！相手をぶっ倒せばいいだけだからな。上に行けばいくほどファイトマネーも高くなる。野蛮人の聖地なのさ。」

キルアが饒舌になって来た所で受け付けにたどり…。

「読めない！」

「書けねぇ！」

「落ち着けよ。ほら、飛行船で教えただろ。」

深呼吸して見たらなんとなく読めた。

「えーと…。」

「格闘技経験１０年て書いとけ。」

「ゴン。あってるか？」

「あ、濁点つけすぎだよ。」

バタバタしながら受け付けを済ませ、いよいよ中へ入った。

そこは、バトルマニアが喜びそうな賑やかな会場だった。

「うわぁー！」

「うわっ。エグッ。」

「懐かしいなー。ちっとも変わってねーや。」

「キルア来たことあるの？」

「ゴン！ここまで詳しんだから来たことあるって！」

「６才の頃かな。無一文で親父に放りこまれた。『１００階まで行って来い』ってね。」

キルアの話に耳を傾けていたら、アクタが激しく肩を叩いて来た。

「なに？痛いから。」

「パンツ師匠が！」

「まさか。ヒソカ様は最上階にいそうだけど、パンツマンはいないでしょ。」

「あ！俺だ！」

ゴンが呼ばれたようだ。キルアが耳打ちをして客席から下に降りてく。

「ゴンに何て言ったの？」

「見たら分かるさ。」

そしてゴンは巨大な男を押していた。しかも遥か先へ吹っ飛ばした！

「すっげー！俺はどうすればいい？」

「んーアクタは…あ！次俺だ。」

キルアは喜んで降りてった。

「ねぇ私たちかなりヤバくない？」

「呼ばれんの怖くなって来た。」

「まぁまぁ、二人とも自分を信じるんだ。」

「やっぱパンツ師匠来たー！」

めちゃくちゃ不安でしたが、パンツマンのおかげでなんとかなりそうです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5777w/

青い蝶～君との冒険～

2011年12月1日19時50分発行